
魔法少女リリカルなのはStrikers～血塗られし王～

大喰らいの牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers（血塗られし王）

【Nコード】

N8869U

【作者名】

大喰らいの牙

【あらすじ】

ある男と女は恋人同士で将来結婚するつもりだったが女は管理局の闇をしてしまったがゆえ、殺される。

男は殺された真実を知った時、管理局に復讐することを心に決める。

キャラ設定（前書き）

なのはで一作品書きました。

色々と誤字脱字が酷いかもしれませんが許してください。

キャラ設定

キャラ設定

名前 神海 鯉斬 （しんかい こうき） 27歳

出身地 第97管理外世界「地球」の「七深」出身

所属 地上部隊 一等陸佐 （一応魔導師でもある。）

魔力SS+（条件を満たすとSSSになる。）

魔導師ランクSS（条件を満たすとSSSになる。）

陸戦 SS+ 空戦 SSS+

魔力変換 水、風、氷の三種類

デバイス ベルカ式インテリジェントデバイス

デバイスの名は「ジョーカー」

形態はチェーン型。

魔力光 深蒼

好きな物 鮫 海が見える丘 船 冴姫の笑顔

主人公のイメージは「デュララ」の静雄をイメージだけど髪の色は銀。

体の方も静雄と一緒に。

脚にはエア・トレック。

だけど、カカトにショットガンが付いてる。（ベヨネッタみたいなやつで撃ち出すのは魔力弾）

走っている道は「血痕の道」、「嵐の道」。

だが、事情により本来は「嵐の道」が使えないため「風の道」を代用している。

基本、「血痕の道」で済みます。

特殊武器

特殊スナイパーライフル「パルチザン・ランチャー」
三枚刃のプラズマカッターが二つと三本のプラズマ刀「グラン・ス
ラッシュリッパ」
四十五口径シールドバンカー「リボルビング・ステーキ」
ベアリング弾「レイヤード・クレイモア」

BJの色は蒼と黒。

イメージは「マトリックス」のネオ達が着ている感じの服装。

裏設定

なのは達よりも早く恋人と一緒に管理局に入っている。

だけど、七年前、結婚する前に恋人が謎の死を遂げた。

恋人の死の真相を知ると同時に管理局の闇の部分を知り、恋人を死
に追いやった上層部と最高評議會を潰す決意する。

レジアスとは上司部下の関係だが計画の仲間であり、酒飲み仲間で
もある。

しかも、スカリエッティとは昔からの友人関係で管理局を潰す計画
に参加しないかと話を持ちかけた。友人のサラ・コーディアともこ
ちら側に着いた。

そのため、レジアスとジェイルとはメツチャフレンドリーです。

たまに、三人と飲みに行くときもある。

ティアナの兄とは先輩と後輩の関係。主人公が先輩でティーダは後
輩。

ナンバーズに対しては妹みたいな存在に近い。

恋人が死んだ時、体の中に海竜神^{リヴァイアサン}を宿す。

FFの召喚獣のようなやつではなく「エア・ギア」を見ている人な
らわかんと思います。アギトの技影^{シャドウ}、つまり巨大な鯨のイメージ

です。

解放時には鯨の特性が使えます。

- ・ 血の匂いに敏感になります。
- ・ 全身を魔力で包みこみ、鯨肌みたいに触れた相手を傷つける。
- ・ 鯨が狩りを行う様に音もなく姿を消し、敵を喰らい尽くすことができる。

キレると人間クレーターができます。というか人が空中で舞います。禁句をいうと殲滅神が降臨、その辺にあるものを武器に暴れます。

はっきり言っておきます、ガチアンチです。なんせ管理局を潰しに掛かりますからね。

あと、復讐が終えたら、ジェイルとレジアスの罪を被り死ぬつもりです。

死ぬかどうかはなのは達にかかっています。

恋人

名前 神無月^{かななつき} 冴姫^{さき} 19歳のときに最高評議会と上層部の手によって残酷に殺される。

出身地 第97管理外世界「地球」の「七深」出身

所属 地上部隊 二等陸佐

魔力 A

魔導師ランク S+

陸戦 A+ 空戦 S

魔力変換 雷、炎の二種類

好きな物 海が見える丘 鯨斬の寝顔

人物像のイメージは「東方」の聖 白蓮。キャーナムサーン

おっとりしてるけど、頭がよく物事をよく見ている。
だが、管理局の闇を知ってしまった為か鯨斬に知らせる前に殺される。

だけど、鯨斬にしか分からないメッセージを残して逝った。

サラとは買物友達であり愚痴を言い合うこともある。

レジラスとも顔見知り。

友人

サラ・コデリア 26歳 女性

出身地 第97管理外世界「地球」の「七深」出身

所属 地上部隊 一等空佐

魔力 A+

魔導師ランク A+

陸戦 A+ 空戦 S+

鯨斬と冴姫の同僚。

よく三人でつるんでいた。飲みに行ったりもしてたりしていた。休日の日には冴姫とショッピングに行ったりしていた。

レジラスやオーリスとも知り合いである。

現在は鯨斬の上司のポジションである。

鯨斬から計画を持ち出された時は、迷った末戦闘はしないが情報を流してもらう風に協力を頼んだ。

「危険と感じたら、すぐに身を引いて構わない」と鯨斬に言われている。

ではちょっとだけ冒頭を入れようと思います。

プロローグ

「うおおおおおおおおおおおおおっ!!」
と一人の男は愛していた女の上で泣いていた。

愛していた女は箱にそれぞれ入っていた。頭と体がバラバラで顔は綺麗のままだったが、体の方は内臓が飛び出ていた。それはとてつもなくグロテスクで目も当てられない状況だった。

友人のジェイルに頼って、綺麗に戻せないかと泣きながら頼んだがせいぜい首がくつつくぐらいで体の方は治らなかった。

「すまない、鯉斬なんとか首は元に戻すことが出来たが、体は・・・」

「いいさ、ジェイル。冴姫も首だけ戻っただけでも喜んでるよ。」

「これからどうするの?」

とサラが聞いてきた。

「地球に戻って、あの丘の上に墓でも作るさ。海を見るのが好きだったし。」

「そう」

といい、サラは帰って行った。

ジェイルはその後の行方不明となった。

これが七年前の出来事。

のちに鯉斬は管理局を潰す為にレジアスとジェイル、そしてサラとともに裏で暗躍する。

「上層部の連中に最高評議会・・・必ず喰らい殺す!!」

と呟きながら右手の薬指に銀の指輪をはめてミッドチルダに帰った。

キャラ設定（後書き）

長くなってしまった設定ですが、めげずにやっと思っています。
意見や感想があれば送ってください。
出来るだけ反映させます。

機動六課・・・か（前書き）

はい、出来ました。

スミマセン、本来ならもっと早く投稿しようと思ったんですが、三連休はずっとバイトで三日間で合計27時間働いたので、疲れて寝てました。

水分補給はこまめやったほうがいいですよ。

機動六課・・・か

「はやてside」

私は八神 はやて 二等陸士であり、部隊長や。歳は19やで
今日から機動六課が新しく動きだしたのにいきなりのピンチャ・・・

「なんでや・・・？」

と一枚の書類を見ながら頭を抱える私。

とそこになのはちゃんとフェイトちゃんが二人揃ってやってきた。

「「どうしたの？はやて（ちゃん）」

右から紹介していくで。

高町なのは 歳はわたしと一緒に19歳。一等空尉で戦技教導官
を務めてる。

管理局からは「エースオブエース」と言われているんや。

次にお隣に居るのはフェイト・T・ハラウオン 歳は19。三人と
も同年や。

執務官の仕事をやっているんや。

とまあ二人の説明はこれぐらいにして、二人にも相談しよう。

「なのはちゃんにフェイトちゃん、この書類を見てくれる？」

「えっ・・・！」

「あっ・・・！」

そこには異動になった者の書類だった。今回地上本部勤務から一人
やってくるのだが、地上本部の人たちとは仲が悪く、管理局でも有
名である。

「機動六課がまだ軌道に乗ってないのに、地上本部からしかもあのレジアス中将の部下。明らかにスパイと疑いたくなるんやけど・・・」

「そう普通なら疑うが、その書類に載っている人物は三人とも少なからず知り合いであった。」

「でも、この人がスパイなんてあり得ない・・・と？」

「そうなんや。」

「鯉斬さん・・・」

「なんで地上本部・・・、しかも、レジアス中将の部下なんかやっておるんや。」

と悲痛な声だった。

三人は訓練校時代に一カ月ほどであったが教えてもらっていた。

「はやてside out」

「鯉斬side」

「来てやったぞ、レジアス」

「うむ、まあ、座れ。」

「お久しぶりです。」

「おう。って言っても、ほんの三日間空いただけだろ？オーリス」と軽い挨拶を済ます。三人。

上司であるレジアス呼び捨てに出来るのは地上本部を探しても、この男、神海しんかい 鯉斬こぎきただ一人だろう。

「で、書類の方は？」

「もうすでに送つといた。」

「そうか」

「これでようやく『計画』が最終段階に入る。」

「長かったな・・・」

「そうですね。」

とレジラスとオーリスは何かを思い出しながら、呟いた。

「なのはたちには悪いが利用させてもらう」

「そういやお前がこれから異動する『機動六課』なんだが、探ってみると色々裏があるぞ。・・・オーリス。」

「はい。これから鯉斬さんが向かう『機動六課』ですが、通称は『古代遺物管理部 機動六課』——ロストロギア関連の部隊ですね。部隊を立ち上げるために後見人になったのはリンディ・ハラオウン、クロノ・ハラオウン。そして、聖王教会のカリム・グラシアの三人となっております。」

と淡々と掴んだ情報を読んでいくオーリス。

「ここまでで、本局と聖王教会の支援を得るなんて権力がスゲエな。」

「続けます。この部隊のコンセプトは『最悪の事態が起こった場合に対応する部署の設立』だそうです。他にも何か隠していますね——ここまででしか調べることが出来ませんでした。これ以上探るとあちらに勘付かれるので・・・」

「いや、大分分かった。礼を言う。オーリス。」

と答える俺。

・・・なんか隠してんな、この部隊。

「叩けば、埃が出る部隊だな。」

「それを言うな。俺だってそうだろ？ しかも、最大級に性質の悪い。しかし、どうやってこの部隊設立したんだろうね。」

「なに？」

「メンバーを見てみると、高町なのは、フェイト・ハラオウン、八神はやて。この時点で魔導師ランクがオーバーススを越えてる。他

にも、ヴォルケンリッターなどといったSランクの魔導師が出てくる。明らかに一部隊にしちゃ戦力を保有しすぎだろ。」

「確かに・・・」

と思案顔になる、レジアス。

「ま、その辺も裏があるんだろうね。・・・うし、まあ行きますか。」

「あ、鯉斬。お前に一つ知らせておく。」

「あん？」

「お前の地位、昇格しといた」

「は？」

「今からお前は神海 鯉斬『少将』な」

ポクポクポク・・・チーーーーーン・・・

「はあああああ!？」

「うるさいぞ。」

「いや、ちょ、うるさくなるわ!!少将ってどういうことだ!!」

「まあ、なんというか、書類の作成上なこっちの方が作りやすくな。」

「オイオイ、マジかよ・・・」

「まあ、いいじゃないか。出世できたのだから・・・」

「所詮、俺にとっては肩書きだ、そんなもの。とはいえくれるなら貰っておくか・・・では、神海 鯉斬少将、これより機動六課に出向します。」
といい敬礼した。

「うむ。よろしく頼む。神海少将。通達は一応お前の上司のサラ一等空尉にしてあるから形式的になるが一応向かってくれ。」

「はいよ。じゃあ、往くなレジアス。・・・たまにはアイツ(・・・

）に挨拶ぐらいしてくれ。オーリスも」

「・・・そうだな。今度の休みにでも行くか。」

「ええ、お父さん。」

「ありがとう」

と言いながら、ドアを閉めた。

「行ったな、あいつがあんな風笑うなんて見たことあるか？オーリス。」

「いや、ないですよ？お父さん。」

「アイツはこの『計画』が終わった時、救われるのだろうか・・・」
と二人しかいない執務室だが響いた。



「サラ、居るか？」

「あら、ようやく来たわね。」

「さっさとやってくれ。向かわなきゃならないんだよ。」

「はいはい。焦らないの。・・・はい、コレが正式の辞令よ。」

「確かに承った。」

「（それじゃ、手筈どおりに情報を逐一に貴方に流せばいいのね？）」

「（ああ、頼む。）」

「では、往きなさい。」

とほんの少しのやり取りをし、地上本部をでた。

間に合うか、分からねえな。

「ジョーカー」

《ああ、なんだ？》

「ブーツを頼む」

《はいよ》

「機動六課はどちらか、分かるか？」

《待て、今調べる。・・・南東の方角だな。走っていけば（・・・・・・）
・・）20分で着くぞ。》

「軽い運動として、走りますか。」

《常人にとっては『軽い』では済まされんな・・・》

なんか言っているが無視する。一言多いんだよ、このデバイス。

その後、「風」を肌で感じ、風が吹いたのと同時に飛びあがり、空を翔けていった。

（鯉斬side out）

（はやてside）

待ち合わせの時間は13時であるが今現在時刻は13時半、30分も遅れていた。

「ふふふ、何やってんや！！鯉斬さんは」

と軽くこめかみに怒りマークが浮かびながら、部隊長室で一人怒鳴った。

そのあと、部隊長室の周りで黒いオーラのようなものが湧き出ているという噂が流れることとなった。

（はやてside out）

（鯉斬side）

空を翔け、機動六課の隊舎についたのは約束の時間の10分前には着いていたが、事もあるうことか迷っていた。

「（部隊長室ってどこだよ？！っそのこと、学校みたいに部屋の目印として看板下げてもらえねえかな。）」

と愚痴りながら、部屋を探す鯉斬。

《コウキ、約束の時間30分もオーバーしてるぞ。》

「あー、ヤベェな。誰でもいいから通ってくれないかな?」

《そうそう、人が通るわけないd・・・》

「どうしたんですか?」

「通ったぞ?」

《・・・・・・》

「??」

何をしてるのか分からない少年は首を傾げていた。

「少年。悪いんだが八神部隊長の部屋を教えてくださいませんか? 恥ずかしいことに迷ってな。」

「あ、はい。こっちです。」

「すまん。」

「いえ。新しく配属された方ですか?」

「いや、異動かな。」

「異動って前はどこに居たのですか?」

「本局」

さらっと答える鯉斬。

それを聞いて、少年は驚く。

「ほ、本局!?!」

「そんなに驚くか?」

「いや、驚きますよ!! だって「おい、エリオ何してんの?」あ、スバルさん。」

とスバルと呼ばれた少女とオレンジ色でツインテールの少女に召喚士っぽい女の子の三人がこちらにやってきた。

「えーと、こちらの方は?」

「神海 鯉斬“少将”だ。今日からここ、機動六課に異動となった。」

「「「えっ?!」」」

しどろもどろになる四人。・・・そこまで慌てるものか?

「あ、あの私はスバル・ナカジマ二等陸士ですっ!!」

「私はティアナ・ランスター二等陸士であります!」

「僕はエリオ・モンディアル三等陸士です!!」

「私はキャロ・ル・ルシエ三等陸士で、ですっ!」

と一気に畏まれた。別にそんなに畏まなくてもいいんだが・・・
というか、ティードの妹にゲンヤさんの娘さんにフェイトの計画で
生まれた子に竜召喚を司る『ル・ルシエ』一族の子か・・・。
これは、なかなかどうして面白いメンバーだな。

「取り敢えず、そんな畏まらなくていいから部隊長の部屋に連れて
って欲しんだが・・・」

「あ、ハイ!すみません。」

移動中・・・

「ここでS・・・!?!」

わー、スッゲー黒いオーラが湧き出てるよ。

「御苦労さん。また会うと思うけどね。」

四人はお辞儀をし、ホールに向かった。

コンコン・・・

「失礼する。」

といい入っていった、かつての教え子に・・・

く鯉斬side out)

（三人娘・鯉斬side）

「失礼する。」

という無愛想な声がした後、問題の人物は入って来た。

「ようこそ、機動六課へ。神海 鯉斬少将」

「神海 鯉斬少将、機動六課に出向しました。」

とまあ、当り前な挨拶から始まった。

一応ココ軍だからな。やらんといかんのよ……。どうせ、潰すけど。

「高町 なのは一等空尉です。」

「フェイト・T・ハラOWN執務官です。」

「八神 はやて二等陸士です。」

「「「よろしくお願いします!!」」」

「ああ。」

とお互いを軽く紹介し合った後、はやてが軽い挑発をしてきた。

「・・・さすが、地上本部の少将。時間にルーズですね?」

「10分前にはこの隊舎に着いてたぞ? 部屋に行くのに迷ったが・・・」

「ところで、神海少将。」

「なんだ」

「単刀直入に聞きます。・・・貴方はスパイですか?」

まあ、普通は聞くよな。目の敵にしているところから人が来れば、疑うのが当たり前か・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さて、どう答えようかね。

「黙らないで答えてください。生憎私はこの隊の総部隊長です。自分の隊に堂々とスパイを置くことなんて、絶対に許しません。・・・

たとい少将でも！」

「は、はやてちゃんそれは言い過ぎじゃ・・・」

「・・・はやて言い過ぎだと思うよ？」

「なのはちゃんにフェイトちゃんは黙ってて」

「スパイじゃない。・・・今はな（ボソッ）」

と最後に疑心を持たせるような発言をしたが、聞こえないようにしたのでバレてない。

「そうですか。その言葉信じます。・・・だけど、裏切ったら覚悟しといてくださいね。」

と表情は変えずとも、睨みつけてきた。

おお、怖い怖い。気をつけるようにしよう。

“覚悟”か・・・

安心しろ、はやて。制裁を受ける時には、俺はもう死んでるよ。

「もう一つ訪ねたいことがあるんですがいいですか？」

「どうぞ」

「鯉斬さん、地上本部では色々悪い噂を耳にしたんですが、説明してくれますか？」

「ええ?! ということ、はやてちゃん!？」

「そんな噂あったの？」

「そりゃもー、たくさんや!! 曰く『神海 鯉斬と一緒に任務に就くと八割ほどの人数が死ぬ』曰く『神海 鯉斬は人殺しだ』曰く『違法組織とつながりがある』など色々黒い噂があるんや!! そこからついた二つ名が『狂飢ノ鮫』や『死を撒き散らすもの』と侮蔑や嘲笑を込めて付けられた名や。しかも、その名が付きはじめたのは七年前。・・・私たちが訓練校で鯉斬さんと冴姫さんに指導を受けてもらってから、三ヶ月後ぐらいから出てきてる。」

「これ、ホントですか? 鯉斬さん」

と事情を聞いたフェイトが問いてきた。

ヒフティ・ヒフティ

五分五分だから、なまじ答えにくい。

が、『計画』を悟られるわけにもいかないので嘘をつく。

「そんな噂をお前は信じるのか？」

「そうですね。でも、その雰囲気は止してもらえませんか？」

「どういう意味だ、なのは？」

「指導していただいた時のような感じの方がいいんです。今の鯉斬さんはあの時の鯉斬さんとは180度違う感じがします。」

「無理だな。」

「・・・何故ですか？」

「あの時の『神海 鯉斬』はもういないんだよ。」

「何故、居ないんです？」

「・・・七年だぞ？七年もあれば、人は変わる。周りが変わるように俺も変わった。・・・ただ、それだけだ。」

「七年の間に何があったんですか？」

「何もない。ただ、理不尽な世界を目にしたただけだ。」

「どういう意味ですか？」

「・・・ハア、終わりの無い質問は終わりだ。用が無ければ、俺は帰るぞ。」

だんだん、答えるのが面倒くさくなった俺は強引に流れを千切った。

「待ってください。このあと、新人四人が訓練を行うんです。見に行きませんか？」

「・・・わかった見に行くから、そんな目で見るな、フェイト」
そんなやり取りのあと、フェイトは僅かながら曇らせた表情からばあつと明るくなった。

なのはから部隊長の部屋を出て、そのあと俺、フェイト、はやてと出たが、はやては何か思案顔になっていた。

「(あそこまではぐらかすなんて、なにかあるんやろな。・・・
人の過去を勝手に調べるは気が進まないけど、私の部隊に不安要素
は出来る限り排除しておきたいし、ロッサに調べてもらおうか)」
と考えをまとめながら、三人の華(?)と共に鯨斬は訓練場に向か
った。

＼三人娘・鯨斬 side out＼

機動六課・・・か（後書き）

なんでこう長くなるかな？

・・・文才が欲しいなあ。

訂正しました。スモーク様ご指摘ありがとうございます。

これ・・・新人の訓練のはずだよな？

（鯉斬side）

訓練場に向かった俺たちは、ちょうど先程出会った。四人組が敵となるガジェットドローン？型を八機程、相手にしていた。

「シャーリー」

「あ、なのはさん。来てたんですか？」

「今来たところだよ。」

「そちらの方は？」

「新しく配属された神海 鯉斬“少将”や」

「・・・へ？」

「神海 鯉斬少将です。よろしくお願いします。」

「あ、その、シャリオ・フィニーノ通信士及びデバイスの制作・整備の主任です。」

慌てて、敬礼しようとするが止めた。

「ああ、いいよ。今、新人たちのデバイスやらなんやらの設定やってんだろ？そのまま、続けていいぞ。」

「あ、はい。」

と作業を続けるシャーリー。

「鯉斬さん、新人四人。訓練を見て、どう思いますか？」

とガジェットを今も破壊しようとしている四人を見ながらいった。

「それは戦技教導官としての質問か？なのは」

「はい。」

「・・・スバルは真っ直ぐすぎる、ティアナは限度ってものを知らない、エリオはスピードだけで他がなっちゃいない、キャロに関し

ては自分の持つ力に怯えてやがるな。」

「やっぱりそう見えますか・・・」

「ああ、特にティアナなんか先走り過ぎてやがるぞ？あのままだと変な方向に走って、自分を壊すな。」

「終わりましたね。」

ブザーがなり、新人たちは帰って来た。

なのはは『壊す』という言葉に僅かに反応していたが、一瞬で元に戻り新人たちに声をかけていた。

あいつまだ自分を偽ってんのか・・・。

偽ってても碌な事にならないのに・・・、俺が言うのもアレだが。

「はい、みんな集合！」

「「「はい！」」」

「あれが私たちが主に戦う相手だよ。大変だけど頑張っていこうね。」

「「「はい！！」」」

「シャーリー、デバイスの方はどう？」

「バッチリですよ。ちゃんとデータ取れています。」

「それじゃ、今度は鯉斬さんの番だね。」

思考停止中・・・。

「・・・はい？」

「いや、鯉斬さんもやるんだよ？」

「マテやコラ、俺ここに来たのは見学するためだよな？なんで訓練に変わってんの？」

「でも、エリオたちも見たがっているし。・・・ね？」

「はい！見たいです！！」

「是非！！」

俺の周り全員が「見たい」という眼差しで見ていた。後ろしか逃げ道がないが後ろにははやてがいた。

「どこ、行くんです？ 鯉斬さん？」

「……………」

「……………やりますよ。やればいいんだろ！」

《諦めろ、コウキ。逃げ場はねえ。》

「うるせーよ！！ ったく、ジョーカー^{セットアップ}起動！！」

《はいはい》

黒いジャケットと多少蒼が混じり、脚にはA・Tに変えた。サングラスは気分で出すが、今回は出さなかった。

《特殊武装は出すか？》

「いらねえ……いや、『グラン・スラッシュリッパー』だけ頼む。」

《分かった。モード“ゲシュペンスト”》

とジョーカーがシステム起動したあと、腰に三本のプラズマ刀が収まった。

プラズマ刀の利点は取り出したのみ、刃が出るようになって使用者以外が持つとただの鉄の棒に戻ってしまうことだ。

俺のみ使える武装だ。他の武装もそうだ。

俺が認証すれば、そいつも使えるが……。

背中には巨大な三枚刃が二つある。普段は折りたたんであるが、投げると開く仕組みになっている。ただし、これは魔力を使わない為、質量兵器である。

「では、準備はいいですか？ 鯉斬少将。」

「ああ。それと少将は付けなくていいぞ。」

「わかりました。では鯉斬さん。位置に着いてください。」

「・・・着いたぞ。」

「では・・・出します。」

さて、そんなじやまやりますか！

鯉斬side out)

三人娘十一人side)

「うるせーよ！！たく、ジョーカー^{セットアップ}起動！！」

鯉斬さんのジャケットや武装を見て、私はこの人もエリートかと気が沈んだ。

「（私だけか、この部隊の中で凡人なのは・・・でも、私は負けない。ランスターの魔法は立派だということを証明してやる！！）」
そんなティアナをよそに三人娘は鯉気の武装に注目していた。

「へー、スバルと似ているなあ。」

「でも、少し違うみたいだよ？」

「うん、カカトになんかついてるね。」

と三人は冷静に観察する。

「鯉斬さん、カカトについてるのは何ですか？」

「あ、コレ？まあ、訓練を見てれば分かるさ。」

教えてくれないようだった。

「むう。」

顔を膨らませるフェイトの表情が次の瞬間驚きに変わる。

「・・・いや、『グラン・スラッシュリッパー』だけ頼む。」

《分かった。モード“ゲシュペンスト”》

「鯉斬さん！それは何ですか！？・・・それに、背中に背負ってる

のは質量兵器ですか？」

「鋭いな、フェイト。やはり同じプラズマ刀じゃ一瞬で分かるか。背中のヤツも当たりだ。」

「鯨斬さん、局員が質量兵器を持つことは禁じられているんやけど、なんで持ってるの？」

「俺は質量兵器を保有することを認められているんだよ。」

「そんなことありえへん!!」

「俺は特別に認証されているがな。ま、規制もある。対人は禁止だ。機械などの無機質相手なら使ってもいいのさ。（本当はすでにこれで人を殺しているがな）」

「・・・確かめさせて貰いますよ？」

「いいぜ。勝手にしな。」

「じゃ・・・シャーリー準備は出来てる？」

「ええ、もう。では・・・出します。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「スタート!!」

となのはが合図を出したときにはすでに七機が壊されていた。

＼三人娘十一人 side out＼

＼鯨斬 side＼

「スタート!!」

と合図と同時にガジェットの後を取り、魔力で覆った腕でガジェットめがけて振り降ろし、『叩き』壊した。

ドゴォン!!

さらに、そのまま降り降ろした腕を基点に体を回転させ、一機をA・Tで真っ二つにし、そのあと腕で貫かれているガジェットを他のガ

「じゃあ、どう答えりゃいいんだよ。」

「ちゃんと、詳しく話して。」

「詳しく話したじゃねーか!!」

「「「「わからないよ!!」」「」」「」」

「えー（・3・）？」

「「「「えー（・3・）？じゃない!!」」「」」「」」

俺にどうしろと。

「じゃ、バカでも分かるように言うと・・・

合図と同時に相手の背後に回る

←

魔力で拳を強化し貫く

←

そのまま腕を軸にして回り、脚の武装に魔力刃を作り真つ二つ

←

貫いたガジェットをそのまま投げつける

←

回転力を利用しスラッシュリッパーを投げる。・・・お解り？」

うんうんとうなずいてくれている。あー、よかった伝わって。

「いやいやいや!! わかるわけないやろっ!？」

解れ、バカ。

「面倒になってきたきたから、あとで映像でも見てろ。」

「投げた?!」

「で、シャーリー。後何機だ？」

「え、あ、はい。あと、八機です。」

「八機ね・・・了解した。（ジョーカー、一応ショットガンを準備しろ。）」

《はいよ。属性は?》

「(風だな。)」

《セットした。》

「(ターゲットの位置は?)」

《ターゲットは・・・北東の方角と東南の方向に四機ずつ分かれて
いる。》

「分かれたか・・・さっきの攻撃であと二、三機巻き込んでおけば
よかった。」

《まあ、準備運動にもならないけど、最初としてはいい方だったじ
ゃねーか。》

「まあ、いいか。考えたらキリがない。・・・ジョーカー東南グル
ープの距離分かるか?」

《ちよい待ち・・・大体900mってところだが、何をするつもり
だ?》

「分かってんだろ?俺が距離を空けた時の戦闘法を」

《これが人なら吃驚するほどの戦闘法だな。まずお前しかやらない
よ》

「・・・ハッ!じゃ、行くぜえ!!・・・フンッ!」

と鯉斬は地面に足を思いつき降り降りした。

ドガァン!

ベキベキバキ!

降り降りされた脚の力によって鯉気の周りには抉れた岩石が数個浮
いた。

しかも、大きさは軽自動車並みの大きさが浮いていた。

そのあと、鯉気は風の膜を作り、浮いた岩石を捉えターゲットの元
目掛けて、『蹴り』飛ばした。

Trick ——— Pile パイルトルネード tornado!! in Sto

ne bullet!!

放たれた技^{トリック}によってターゲットまでの道が確保され、そのあと数個の岩石は時速100kmを超えるスピードで飛んでいった。途中、建物の壁に当たっていたが、バターが溶けるように瓦解していき、ターゲットに直撃した。

「よし、残り四機だな。」

《あゝあ、あいつら目が点になってんぞ。何かしら言われるぞ、これを見たら。》

「あいつらには向けないさ。……99%の確率で。」

《1%はあるんだ。》

「その時の気まぐれで、さてもう一グループの方もパイルトルネードでルートを確保するか。その後は……成るようになるだろ。さて、もういっちょ、オラァ!!」

Trick —— Pile tornado Limited
express!!

先ほどとは違う形のパイルトルネードを創りだした。中に“レール”を引きその中を走っていった。空を翔けてもいいのだが、走った方がエネルギーが溜まるからだ。

「……いくぜ!」

ジャカツ!

「穿て、牙!!」

ズドバァァン!!

ゴオオオオオ……

バァンツ!!

放たれた牙によって二体のガジェットは粉々になった。

「ジョーカー!!」

《OK!! Fire!!》

『テンペスト!』

ドン!

カカトのショットガンから魔力で造った槍が風の力を纏い、発射されAMFをいとも簡単に貫き、最後のターゲット二つを破壊した。

《ターゲット全破壊、訓練終了。》

「あゝ、説明するのメンドクセ。逃げちゃダメかな?」

《ダメだろ。》

「デスヨネー。さて・・・言い訳の貯蔵は充分か?」

《お前は、何を言ってるんだ?》

ホント何言ってるんだろうね。

＼鯉斬side out＼

＼三人娘side＼

開始直後に出したガジェットが目にも止まらぬ速さで七機も破壊されていった。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・え?」」」

この光景には私たち三人でも信じられなかった。

「えと、なのはちゃん。今の見えた?」

「私はあの大きな武器を投げたところしか・・・」

「私は脚で真っ二つにしたところからようやく・・・」

なのはとフェイトでも、一連の動きを完全に見切ることは出来ない

らしい。

鯉斬さんが「ビデオ映像でも見てろ」というのでスローで見えることでようやくどんな行動したのか分かったが、それでも相当の無茶ぶりの戦闘法だった。

はやて・・・

え、ナニコレ？

こんな誰も出来へんよ？

どうやったら出来るん？

なのは・・・

わたしでもこんな動きは絶対に出来ないよ。

やっぱり、何かしら魔力で強化してるのかな？

終わったら聞いてみよう。

フェイト・・・

私よりも早い・・・。

速さには自信があったのに・・・、こんなの見せられたらちよつと落ち込むかも。

というよりも、一度やり合ってみたい。終わったらお願いしてみよう。

三人ともそれぞれの想いを抱きながら、映像を見ていた。

このビデオを見た後、はやてはシャーリーに残ったガジェットを半分に分け、別々の位置に置くように指示をした。

「さあ、今度はどうやって対応するん？」

といったずらっ子のような表情だったがその表情が一瞬で変わることを誰も予想していなかった。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

本日の二度目の沈黙。

なんせ、地面が抉れ、浮いた岩石（大）が時速100kmオーバーでガジェットを鉄屑に変えているなんて誰が見ても、驚くというより夢を見るような光景だ。

新人四人なんか、やっとの思いで破壊した相手をあんな風に破壊されちゃ、落ち込むだろう。

もうすでに四人ともorz状態だった。

そのあとの光景も見たんやけど、もう何も言わへん……。
悪い夢と思いたい。

……そんなキミたちにいい言葉を教えよう。
……エライ人はこう言いました。
……「常識は投げ捨てるもの！」

「「うるさい!!!」」」

アカン、なんか変な電波をかんじてしもうた。
ちよっと、疲れてるんやろか……。

訓練を終えた鯉斬さんが帰って来た。説明してもらわんと!!
三人娘 side out

これ・・・新人の訓練のはずだよな？
(後書き)

無茶苦茶な戦闘法・・・。

体が静雄ベースだから出来る戦闘法ですね。

常人はまず無理です。

技の説明でも。

テンペスト・・・風の力を纏った魔力砲。形状は槍になっている。

A M Fの効果は受けるが、速度が速いため無効化される前に相手を貫く。

チートだなこれは。

説明会（前書き）

時間が掛かってしまってすみません。

これから、真恋姫の小説の製作に入ります。
ちゃんとした作品になるかな。

説明会

（鯉斬side）

いやー、体を動かした後は気持ちいいね！

・・・・・・。

スマン、ちよつと現実逃避していた。

これさえなければなあ・・・。

目の前には今の訓練でした動きなどを詳しく知りたいという目、一戦交えたいという目、尊敬する目と色々な視線が思いっきり突き刺さっている。

・・・痛え。超痛え。

特に、はやてとフェイト、ティアナなんか凄まじい眼力だ。人殺せそうだな。

「・・・・・・なんか質問は？」

重い空気に耐えられなくなって、質問を許した。

「今の何ですか!？」

「かっこいいです!!」

「どうやったんですか!？」

「どんな魔法なの?!」

「詳しく教えてや!!」

「鯉斬、一戦交えて欲しい。」

一片に來た。まあ、分かってたけどさ・・・。

「魔法は極力使っていないぞ？」

「「「え?」」」

「だから、魔法はあんま使ってないって言ったんだよ。」

「「「ええー!」」」

そんなに驚くもんかね？

「だって、竜巻とか出してじゃん!!」

「ありゃ、自然の力で出したんだ。」

「じゃあ、そのあとガジェットを壊したのは？」

「あれは制動エネルギーだ。」

「「制動エネルギー？」」

と首を傾げる者たち。

「あー、あれだ。簡単に言うそうだな。自転車あるだろ？アレってペダルを漕ぐことで前に進む。そこまでは分かるな？」

頷く八人。

「その漕いで出来るエネルギーを一か所に集めて放出する機能が俺の武装には付いているんだよ。OK？」

八人は「なるほどなー」と頷いていた。

はやてはすかさず次の疑問を聞いてきた。

「じゃあ、あの竜巻や岩石の弾丸は？」

「アレも、この武装でやった。地面を抉ったことは説明しなくていいな。やったあとの方が重要だ。アレは岩石の塊を風の膜で包み込んだだよ。」

「風の膜？」

「実際にやった方がいいな。ちょっと離れて……ズンッ！」

誰か寄ってみてみ？」

と少し離れたあと、俺を中心に風の膜のドームを創り誰か来るように指示した。

どうやら、スバルが来ることとなった。

「行きますよ、鯉斬さん。」

「少し助走してからの方がいいな。」

「え……。大丈夫なんですか？」

「安心しろ、突っ込んだところで動きづらいと思うから。」

スバルは勢いよく突っ込んだが、膜に触れた瞬間、まるで見えない壁に阻まれたように動きが止まる。

「どう？スバル。」

「くっ！！痛いです。」

「あとはこの膜を利用して、空気を回転させ風の“面”を叩きつけるように足でやれば技の完成だ。」

「じゃあ、魔法を使ったのは？」

「ガジェットを拳で貫いた時と脚で真つ二つにした時、そして最後のガジェット達を破壊した魔力弾ぐらいだな。あ、あと魔力刃を創った時のみな。」

「それしか使っていないんですか……」

「基本的に俺は魔法は身体強化と魔力弾ぐらいかな。メインは自然の力だから。言っちゃえば、自然の力がある限り俺の戦場はどこにでもあるって言えいいかな。ガジェットみたいなアンチ系を使う敵にとっては、俺という存在は天敵なのさ。」

（鯨斬side out）

（三人娘・鯨斬side）

「鯨斬、一戦交えたいんだけど……」

とさつきから戦いたいと主張するフェイト。

コイツ……。もう完全なバトルマニアになってねえ？

シグナムが原因だな。

「また今度だ。一応同じ部隊だ、明日でも出来るだろ。」

「むう……。」

「そんなにむくれるなよ。」

と表情は変えずともむくれるフェイトにしようがなく頭を撫でた。

「え、ひゃっ!？」

「今日はこれで我慢してくれ。」

「・・・はい／＼／」

「・・・はい／＼／」

フェイトを余所になのはとはやては「ジッ」とこちらを見ていた。

「（・・・ずるいなあ、フェイトちゃん。憧れの先輩を独り占めして・・・）」

「（・・・あのフェイトちゃんを手なずけた!？くっ、侮れん人や!）」

二人は全く違うことを考えていたようだ。

・・・無言が怖いんで喋ってもらえませんか？

「メシ食いに行くかー、腹減ったし。」

「あ、いいですね!」

「僕もおなか減りました。」

「私も」

「ということで、訓練を終わりにしたいんだが、・・・その三人娘聞してる?」

「「「・・・」」」

「思考の中に居るみたいなんで、俺が仕切るか。んじゃ、訓練終了だ。」

「「「はい!有難うございました!」」」

「おう。シャワー浴びてから食堂に集合すつか。」

「「「はい!」」」

「シャーリーも御苦労さん。」

「あ、はい。なのはさん達どうしましょ?」

「ほっとけ、そのうち返ってくるだろ。」

「でも、このままは・・・」

「ハア、何時まで経っても手間のかかる後輩だな。・・・レイジングハート、バルディッシュ。」

《《なんですか？鯉斬さん》》

「返ってきたら、食堂にいるって伝えておいてくれ。」

《《わかりました。》》

「一応呼びかけろ、それでも起きなかつたらこう言え。確実に起きる。」

「・・・・・・・・・・だ。」

《《やってみます。》》

「頼むぞ」

といい、エリオに案内してもらって行った鯉斬。

これを聞いてたシャーリーは「このあとが怖い」と思いながら、整備室に帰っていった。

なのは達を除く六人が隊舎に帰った後、例の如くなのは達は思考の中に居たため、レイジングハート達が一度呼びかけたが、反応がなかったため鯉氣に教えてもらった言葉をかけた瞬間、一瞬で三人は戻って来た。

三人は「誰に教えてもらったの!？」と鬼気迫る様子で聞いてきたので答えたところ、一直線に目的地に目掛けて走っていった。

レイジングハート達は要件を伝えたあと、《《大変なことになりそうだ》》と呟いていた。

＼三人娘・鯉斬side out＼

＼鯉斬・フォワード陣＋バカ三人side＼

「・・・スバル、エリオ。お前らそんなに喰うのか？」

「いつもコレぐらいが普通ですよ？」

「自然と入っちゃんですよ。」

三人娘を除くメンバーは食堂に集まり、各々食べたいものを頼んでいたんだが、はつきり言って、ちよつと想像を超えていた。・・・特にスバルとエリオ。

軽く三人前はある、ナポリタンを普通に二人で完食していた。

ありえねえだろ・・・、どういう胃袋してんだ？

と食事が進み、ある程度経ってから、バカ三人がこっちに迫って来た。

あの様子だと、一度では起きなかったな。

「「「鯉斬さん！！！」」」

「耳元で騒ぐな。騒々しい。それと食事中だ、静かにしろ。」

「「「あ、はい、すみません。・・・じゃなくて！！！」」」

「なんだよ・・・」

「「「なんですか！！あの起こし方は！？」」」

「あれが一番手っ取り早いんだよ。呼ばれたくなかったら一回で起きろや。」

「「「うっ！！」」」

至極真つ当な反論されて言い返せない三人。

「ちなみになんて言う伝言を残したんですか？」

と命知らずな発言をするスバル。

・・・勇気あるなお前。

「聞いてもいいけど、後のこと・・・」「おが！？」

「なんでもないよ、スバル」

「そうそう、なんでもないからね？」

「そうや、なんでもないで。」

と三人がかりで鯉斬の口を押さえる。

「（ちよっと！スバル。止めておきなさいよ！）」

「（えー？）」

「（「えー？」じゃない！見なさい隊長達を表情で隠れているけど、修羅のようなものが見えるわ。）」

「（・・・うわ、ホントだ。止めておこうか、ティア。）」

「（そうしなさい。）」

「やっぱやめます。」

「そ、そう。よかった。」

「ほんまや。」

「ホントだねー♪」

と笑っているがどこか笑っていないなのは達。

口の拘束を解けた鯉気が言った。

「どうせ、バレるんだからこのさいバラしちゃえよ。」

「にゃはは、鯉斬さんはちよっと黙っておこうか？」

「そうだよ？鯉斬。ちよっと黙ろうか？」

「そうやで、鯉斬さん。こんなことで命散りたくないやろ？」

・・・おおう。凄い威圧感だ。常人なら発狂しかねないな。

いや、むしろ喜ぶかもしれないな。美少女三人がこんなに迫ってきたら。

・・・現在の状況がなかったらだけど。

「そんなんだから、“白い魔王”と呼ばれるんだよ。なのは」
サラっと言ってしまった鯉斬。続けて爆弾投下発言。

「フェイトも“夜叉”って言われたくないだろうが。はやては黒い発言ばっかしてるから“豆狸”って呼ばれるんだよ。」
この発言に三人とも固まる。

「「こ う き さくくん???」」
マジで目が怖いです。

「今日は寝ずに“お話”しようか？」

「そうだね、“オハナシ”しよう、鯉斬」

「そうやな、そうしようか。鯉斬さん？」

「・・・俺、夜用事が・・・「却下」」

「デスヨネー」

魔王からは逃げられないか・・・!!
しようがない、この手を使うか。

「夜までってことはなのは達は俺の“夜の”相手をしてくれるってことかい？」

突然の発言にその場の人間が一度止まる。

「えっ!？」

「ふえ?!」

「・・・／／／」

「「「え？」」」

「どうなんだ？」

「「「・・・／／／」」」

どうやら三人とも答えられないようだ。

おおかた、“夜の”想像をしてんだろう。・・・違う捉え方もあるのに。

・・・エロくはないぞ？

まだ“夜の”しか言っていないし、その後に言葉が続くかもしれない

のにな。

「さて、返答は？」

「いや、もういいです。」

「・・・ウチも」

「・・・私も」

「そうか。ちなみに何を想像してたんだ？」

意地悪く追撃をしかける、俺。

「え、えっと・・・なのはちゃん頼むで！」

「ふえ！？じゃ、私もパス！フェイトちゃん頼んだ。」

「ズ、ズルイよ、二人とも！！」

「で、何を想像してんですか？」

完全に追い詰められたフェイトは恥ずかしそうにちいさな声で答える。

「（・・・・・・・・・・）」

全く聞こえなかった。

「なに？聞こえないよ？」

「（・・・・・・・・・・）」

すでにフェイトの顔は真っ赤だ。

フェイトにとって最大の声だったのだろうが、聞こえない。

なので皆さん。はい御一緒に・・・。

「なあゝにゝ、聞こえんなゝ？」

・・・もうやめて！フェイトのライフは0よ！！

だが断る！！というのは冗談でえ、これぐらいにしておこう。フェイトが倒れかねない。

「冗談だ、フェイト。悪かったな悪戯して。」

「・・・うう、グスッ。」

「もー、泣くな。なんか次の休み奢ってやるから。」

「・・・うん。」

「というか、想像しすぎなんだよ、フェイトにはやて、なのは。俺はまだ“夜の”しか言っていないぞ。その後にまだ言葉が続くかもしれないだろ？食事とか訓練とかさあ。」

「「「あ・・・」」」

この発言で全員がソッチの発想に至っていたことがわかった。分かりやすく、何よりです。

「んじゃま、俺は先に上がらせてもらうぞ。荷ほどきしなきゃならないしな。」

と言って食堂を出た。

そのあと食堂に居たメンバーはこう思った。

「「「絶対に鯉斬（少将）（さん）に口喧嘩を仕掛けるのは止めておこう」」」」

となんせ、あの“エース・オブ・エース”のなのはが口で負けた光景をこの目で見てしまったからだ。

その後、機動六課では暗黙のルールの一つとして加えられた。

一方、鯉斬はあのやり取りを見てたヴァイスに以後旦那と呼ばれるようになったらしい。

（鯉斬・フォワード陣十バカ三人side out）

説明会（後書き）

最後がエロくなっただが、たまにはいいよね！

教導開始・・・そして、蠢く影

鯉斬side

今、新人の訓練が始まったようだ。

現在俺は、ちよつと部屋を改造中だ。

電話などを盗聴されない為に、特別なものに変えている。

・・・ガリガリ。

完成した。これで脳髓共にバレないだろう。

さて、俺もそろそろ訓練に参加しますかね。

鯉斬side out

なのはside

「はい。じゃ、三セット目いくよ。準備はいい？」

「」「はい！」「」

「訓練スタート！！」

と同時にガジェットが八機出現した。

前回は倒すのに一苦労したが、教導のおかげかそんなにも苦にはならなくなっていた。

それでもつらそうだが。

そこに少し遅れて鯉斬さんが来た。

「おう。おはよう、なのは。」

「お早うございます。鯉斬さん。遅刻ですよ？」

「ちよつと、荷ほどきに時間を食ってな、寝るのが遅かったんだよ。で、アイツらはどんな感じだ？」

「いい感じですよ。育てがいのある四人です。」

「さいですか」

「あ・・・終わりますね。」

なのはがスバル達を見て言った。

スバルの最後の一撃がガジェットのAMFを貫いて、ブザーがなる。

「この戦闘で10分を切らないか・・・ちょっと、辛いな。」

「でも、初めての方では良いタイムだと思うけど・・・」

「せめて、7分は切って貰わなきゃダメだな。」

「キツすぎませんか？」

「たかが、ガジェットに10分も掛かってられたら、複数犯のグループに当たったとき、レリックを持つてかれるぞ？」

「それを言われるとちよつとな〜。取り敢えず、スバルたちが待ってますので行きましょう。」

そんなことを言いながら、俺たちはスバルたちの元に向かった。

「なのはside out」

一方こちらは・・・

「フェイト・はやてside」

私たちは今、地上本部でロストログア“レリック”の危険性について会議をしていた。

「さて、今回集まってもらったのはこれをお話するためです。」

と言うとモニターに赤い水晶が映った。

「ロストログア、通称レリック。なんらかの目的で造られた超古代文明技術です。」

「しかも、このレリック見た目は小さいですが、扱いを間違えると凄まじい災害を引き起こします。そのうちの一回は数年前に起こった“ミッドチルダ第四ポート火災事件”でも、原因はこのレリックと判明しています。」

そこまでいうと、会議のメンバーは騒ぎ始めた。

「しかも、このレリックを何個か回収しようと未開踏の星に行ったところ、その行く先々に研究所らしきものがありました。いずれも、痕跡は残されていませんが、誰かが意図的に研究していることは明らかです。」

「そこで、このレリックなどの対ロストログニア専門の対策室が私たち“機動六課”です。」

と機動六課の存在を話し、しばらくたってから会議を終わりにしようと思ったとき、ある一人の局員が意味深い言葉をかけてきた。

「八神二等陸佐。」

「はい。なんでしょう？えと・・・」

「ああ、スイマセン。私はクライブ・リュート一等陸士です。」

「これは失礼しました。クライブ一等陸士。で、ご用件は？」

「機動六課に神海少将っていますか？」

「はい。いますか？」

「そうですか・・・。これを伝えるのは極秘の為、あまり彼に気取られないようにしてください。」

「なんですって？」

「彼は私たち管理局に対して何かを隠しています。それにウチの調べではスパイの疑惑が掛かっています。充分気を付けてください。・・・では失礼します。」

と言ってクライブは去っていった。

「・・・はやて、今の話し信じる？」

「信じたくない。だけど、地上本部の情報はたまに核心をついた情報が紛れこんでおるから、無視するわけにもいかんしなあ。・・・フェイトちゃん。さっきの話、誰にも話さんでおいでくれるか？私の方でちよっと、探ってみる。」

「・・・分かった。誰にも話さないよ。じゃあ、帰ろうかはやて。」

「そやな、帰って昼食にしようか。」

私たちは意味深な話を聞き、地上本部を後にした。

＼フェイト・はやてside out＼

教導開始・・・そして、**蠢く影（後書き）**

今回短っ！

どうしてこうなった？

覚醒セシ者（前書き）

なのはも出来たので投稿だ！

覚醒セシ者

鯉斬side

【・・・・主よ。】

「誰だ？俺を呼ぶのは？」

【俺は、・・・・だ。】

「聞こえないぞ？」

【随分前から俺は呼びかけている。】

「姿を見せろ！！」

【再び、主の前に現れる。その時に再び会おう・・・・】

「オイ！どういことだ！？」

【・・・・・・】

そこで俺は目が覚めた。

なんだったんだ、今のは？

そこになのはが覗き込んできた。

「大丈夫ですか？鯉斬さん。」

「あ、ああ。別になんでもない。」

「そういう風には見えないですが・・・・」

「ちよっと、寝不足なだけだ・・・・」

「そうですか・・・」

「で、新人たちの訓練はどんな感じだ？」

「皆、よくやってくれてますよ。・・・ボロボロですが。」

「ま、最初はそんなモンだな。慣れてもらわないとこの先に進めねえからな。」

「そうですね。キツイけど皆には頑張ってもらいたいですね・・・はい、訓練終了！」

なのははスバルたちの元に行った。鯉斬が呟いていたとも知れずに・・・。

「そう、頑張ってもらわないと困るんだよ。・・・俺の計画にも、な。」

そう呟き、鯉斬もスバルたちの元に向かった。

行ってみるとなんか焦げくさかった。

「スバル、お前のデバイス煙上がってんぞ？」

「へっ？ ああー！！！」

原因は無理に扱っていたため、負荷に耐えれなくなっていた。

「ティアナのアンカーガンも結構ガタが来てるだろ？」

「え、あ、はい。分かってたんですか？」

「スバルを援護するとき、一度スカッただろ？」

「うっ！」

「なのは、そろそろ新デバイスを与えても良いんじゃないか？」

「ちょうど、そう思っていました。」

「「「新デバイス？」」」

「そう、新デバイス。そのままの状態で任務に就かれても、命を落としかねないからな。「それなら」

「それなら、一気にデバイスを新しくして、気を引き締めると同時

にお祝いも兼ねてね。取り敢えず、シャーリーのところに向かおうか。」

「「「はい！」」」

（鯉斬side out）

（なのはside）

鯉斬さんの表情が突然すぐれなくなっていたのを見て、私は心配したが本人が「大丈夫だ」と言っていたのでそれ以上は言わなかった。訓練を終了させ、皆を集めた時にスバルの足から焦げ臭いにおいがした。

よく見てみると、オーバーヒートしていた。

「（そろそろ、新デバイスの出番かな？）」

「なのは、そろそろ新デバイスを与えても良いんじゃないか？」

「そうですね、ちょうど思っていました。」

鯉斬さんはエスパーかな？

私が思っていたことを先に言うなんて……。

私たちは取り敢えず、シャーリーのところに向かうべく移動した。隊舎に着いた時、向こうからフェイトちゃんの手がやって来た。

「なのは。」

「わぁー！これフェイト隊長の手ですか？」

「うん、そうだよ。ゴメンネ、エリオにキャロ。本来なら私が訓練

を見る筈なのに……」

「いえ、大丈夫ですよ。」

「はい、大丈夫です。」

「そう、ならよかった。」

「フェイトちゃんたちはこれから外回り？」

「私は、聖王教会に用事があるから、送ってもらうんや。」

「そのあと私は、6番ポートに用があるから送ってから向かうの。」
「そうなんだ。」

はやてちゃんが「意外と部隊長って大変なんよー」と言っていた。

「あ、鯉斬さんもちよつと私と一緒に着いて来てくれませんか？」

「俺がはやてと共に？」

「ええ、カリム・グラシア少将がお話したいそうです。」

「・・・分かった。なのは後は頼むぞ？」

「はい。」

「ジョーカー、足のみ起動しろ。」

《ああ、了解。部分展開だな。》

「そうだ。」

《・・・展開完了》

「なんで展開してるんですか？」

「フェイトの車は二人乗りだろう？だから、俺はその車の後を追いかける。」

「そんなこと出来るんですか!？」

「出来るぞ？」

《実際、コイツ六課の隊舎に来るときに本部からここまで翔けてきたしな》

軽い準備運動程度だったんだけどな。

「」「ウソっ!？」」「」

《本当だ》

「というわけで、フェイト達は車の上に目印みたいなもの付けてくれよ。それを目印に追いかけるから。」

「え、あ、はい。」

「じゃあ、先に行け。追いかけるから。」
と言った鯉斬さん。

フェイトちゃんたちは先に行き、しばらくしてから鯉斬さんは動いた。

「そろそろ、良い距離かな？」

「へっ？」

「んじゃ、行ってくるわ。」

と言った瞬間、一気にジャンプし「いい風だ」と言ってフェイトちゃん達を追いかけていった。

あり得ない光景を目の辺りにした私たちは半ば呆けていたが、氣を取り直してシャーリーのところに向かった。

「じゃ、じゃあ、みんな行こうか？」

「「「「・・・」」」」

「なのはside out」

「フェイトside」

鯉斬から「先に行け」と言われ、上に目印を付けて向かっているが、ミラーを見ても鯉斬の姿は無かった。

「鯉斬、追いついてないね。」

「追いついてないなあ。」

「・・・スピード、落とす？」

「落としたほうg・・・!？」

「どうしたの、はやっ・・・!!」

バックミラーを覗くと鯉斬が空を翔けていた。
こちらに氣が付いたのか、手まで振っていた。

「もう、何も驚かへんよ。」

「何も言えないよ・・・鯨斬」

そんなことを呟きながら運転し、一行は聖王教会に着いた。

＼フェイトside out＼

＼鯨斬side＼

うい、無事にフェイトたちを追いかけて、聖王教会に着いた俺たちはやてからは「ありえへん」とorzになっていた。

俺の行動ってそんなにおかしいのか？

《おかしいに決まってるだろ。》

うるさい。心を読むな、ジョーカー。

フェイトははやてを送ったので6番ポートに向かった。

「はやて、ほら行こうぜ。カリム・グラシア少将のところに。」

「あ、はい。そうですねー(棒)」

「なんで、そんな不機嫌なんだよ。」

「気にしないでください。」

よく分からねえ奴だな？

＼鯨斬side out＼

＼カリムside＼

今日ははやてとゲストの方が来る予定だった。

時計を見ても、そろそろ来るはずだった。

そしたら、シャッハから伝言で「はやてが来た」と通信が入り到着したと報せが来た。

「失礼します」

「久しぶりね、はやて。」

「カリム、久しぶりやな。」

「そして・・・ようこそ、聖王教会へ。神海 鯨斬少将。」

「神海 鯉斬少将です。・・・カリム・グラシア少将。」

「堅くならなくても結構ですよ。」

「挨拶ぐらいは真面目にやった方がいいだろう？」

「それもそうですね。立ち話もなんなのでこちらにどうぞ」

一服中・・・

「で、今回はちょっと頼みごとをお願いしたいのよ。」

と言って、カーテンを閉めた。

映し出しているのは、ガジェットの新型と不審貨物。

「ここ最近、新型のガジェットが二つほど出現したのよ。特に三型は人よりも若干大きい型です。それと同時にミッドチルダに不審貨物・・・多分レリックだと思うんだけど。」

「ちょっと早いような気がするなあ。レリックがガジェットに見つかるまでの時間は？」

「予想では今日、明日かしら。だからこそ、相談したかったのよ。・・・対処をしくじるわけにはいかないし。」

言ったがはやてはカーテンを開けた。

「大丈夫や。カリムのおかげで、部隊の隊長達にフォワード陣は動かせる。」

さらには不測の事態にも対応できる下地が出来てるから心配はいらへん。」

「そうね。」

「で、俺がここに呼ばれた事の説明は？」

今まで黙っていた、神海少将が口を開いた。

「そうでした。・・・そろそろ本題に入ろうかしら。」

「そやね。」

「神海少将、貴方にスパイの疑惑が掛かっています。」

「へえ・・・」

「あまり動じませんか？」

「動じて隙を見せる奴は、バカだろ？」

「そうですか。」

「で、情報源は誰だ？」

「言えません。」

「そうかい。・・・見当はついてるがな。」

「なっ!？」

「知っているんですか？」

「多分、クライブ辺りが言ってきただろ、はやて？」

「なぜ・・・分かったんですか？」

「アイツは昔から、他人の不正行為を探し出してそれを晒すことで上に昇っていった人間だからだ。ときには嘘の証拠も本物だと思わせてやっているしな。」

「それ、ほんまですか？」

「ああ、本当だ。」

「大方、俺の異例な出世が気にいらねえのが原因だろうよ。（本音は奴の上司は確か、脳髄共の息のかかったやつだから、脳髄共が命令して、それをその上司が奴に命令したと言う形だろうな。）」
地上本部は伏魔殿だバンデモニウムって言われてるけどその通りみたいね。

「それが用件か？」

「ええ、そうですが、事の真意が分かったのでいいです。」

そのとき、アラート音が鳴り響いた。

「コイツは第一級警戒態勢か、レリックが見つかったかな？」

「はやて!」

そこから、私たちは話し合いを止めて、それぞれの戦場に向かった。
カリス side out

覚醒セシ者（後書き）

よくよく考えてみたら、車を追いかける程の体力があるんだろうか・・・

最初の冒頭の流れは、なんなのか。想像してみてください。

そして、これから新人たちの魅せ場だ。

『ファーストアラート』にどんだけ時間食ってるんだ？

最後にこれからちよくちよくと脳髓共のちよっかいが出てきます。

ファーストアラート 前編（前書き）

一つに纏めきれなかった・・・。

ファーストアラート 前編

「鯨斬side」

やかましく鳴り響く警報、そのあと機動六課と帰る途中のフェイトにつながった。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、大丈夫か?!」

「「大丈夫!!」」

「対象はリニアで移動中・・・」

「移動中ってまさか・・・!!」

「そう、ガジェット達に占拠されて、制御システムが完全に狂わされている。」

「私はこれから、急いで戻るけど二人にスバル、ティアナ、エリオ、キャロ行けるか?」

「「「はい!!」」」

「鯨斬さんはどうします?」

『俺は直接向かう。空の掃除だ。・・・ジョーカー!!』

「分かりました。では、機動六課フォワード陣出動!!」

そこで、通信を締めはやては出る準備をした。

俺か?ちゃんと着替えたよ、戦闘服に。

《準備出来たぞ?》

「よし・・・先に行ってるぞ。」

「はい。なのはちゃんたちも後ほど追いつくと思うんで・・・。それまで保ってください。」

「安心しろ。着いた時にはほとんど殲滅しているだろうよ。」

「「へっ?」」

と言って、裏口から出た俺たち。

俺は何回か、準備運動をした後、空を翔けた。

＼鯉斬side out＼

＼はやてside＼

鯉斬さんが空を翔けた後、私は思ったことを口にした。

「いつ見ても、おかしいと思うんやけど、カリムはどう思う？」

「え？ ええ、私もそう思うわ。それよりはやく戻りなさい。シャツハお願いね。」

「分かりました、騎士カリム。」

「また会おうな。カリム。」

「ええ。またね。はやて」

新人四人を入れた、初出動や。
気合を入れなかアカンな。

＼はやてside out＼

＼なのはside＼

今私たちは、ヴァイスくんが運転する『ストームライダー』で移動中だった。

みんな初めての出動であって、緊張しているのか黙っただけだった。

「みんな大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫です！」

「私も」

「僕も」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

キャロだけは返事をせず、俯いていた。

「キャロ……。怖いのは分かってるよ。だけど、失敗しても構わないから精一杯頑張ろう？」

「・・・・・・・・はい！」

「さて、なのはさん！目的地に！？」
ヴァイスくんの声が途中で止まった。

「どうしたの？ヴァイスくん？」

「なのはさん、アレ！！」

ヴァイスくんが指差す方向には、想像を絶する光景があった。

「なのはside out」

「フェイトside」

「グリフィスくん、私に飛行許可を。」

『はい。飛行許可認証します。』

「ありがとう」

『もう、すでに神海少将が現場で交戦中です。』

「分かった。・・・バルディッシュ！！」

《セットアップ！！》

BJに着替えたフェイトはそのまま一気に上空まで昇り、鯉斬の元まで向かった。

「フェイト・ハラオウン、行きます！！」

「フェイトside out」

「鯉斬side」

さて、今現在俺はリニアの近くの空に居る。

さすがに、同じ動作を動かすのは疲れるので、飛行魔法を使っている。

「（さて、おい！出番だぞ！！・・・「ZZZ」起きろ、メガロ！！）」

『ん？ああ、なんだ鯉斬？』

「（仕事だ。全部喰らえ。）」

『あの鉄の塊どもをか？』

「（そうだ。）」

『メンドクセえな』

「（やかましい。働け！！）」

『はいはい。』

「（いくぜ！！・・・全てを喰らい尽くせ！！リヴァイアサン海竜神！！）」

と言葉を発した後、飛行ガジェットの下から大きな影が現れ、次の瞬間身を翻すようにメガロはガジェット達を喰らった。

ザバァン！！

ガシャ、ベキベキ！！

体に付いてあるヒレや尾びれで喰い残したガジェット達を両断していく、数百機あった飛行ガジェット達はたった一回の喰いで、約9割が破壊されていき制空権を制圧した。

そのときに、なのは達を乗せた『ストームライダー』が降下ポイントまで来た。

（鯉斬side out）

（なのはside）

私たちが見た光景は、想像を絶するものだった。

私たちが機動六課を出てから、5分少々の間で空を埋め尽くしていた飛行ガジェットはほぼ消え、制空権を確保していた。

それよりも驚いたのが、あの巨大な鯨だ。

「あんなのどこから出てきたの！？」

その時、鯉斬さんから通信が来た。

『・・・ヴァイス』

「旦那!! アレは何ですか!？」

『それよりも新人たちを下せ。やるべきことをやらせろ』

「うす。・・・それじゃあ、なのはさんにガキども行けるな!？」

「「「「はい!」」」」

「じゃあ、私から行くね。・・・皆、頑張っていこう!!」

「「「「はい!」」」」

そして、私は『ストームライダー』から降りながら、BJに着替えた。

「レイジングハート、セッット・アップ起動!!」

そのあと、スバルたちは次々と降りていき、無事リニアに着地した。私も、鯨斬さんの元に向かわなきゃ!

「なのは!」

「フェイトちゃん!」

「一緒に鯨斬さんの元に行こう。」

「うん。」

あの鯨について、聞かなきゃ!!

「なのは side out」

「フェイト side」

私はなのは達よりも若干早く、交戦ポイントの空域に着いていた。遠くに鯨斬の姿を視認出来た。

その時、急な次元転移反応が現れ警戒した。

反応場所は、あの飛行ガジェットの群れの真下からだった為、敵の増援と思い急いで鯨斬の元に向かおうとしたとき、その反応場所から出てきたのは、説明するのが難しくかつ理解できなかった。

なんせ、XL級戦艦ほどの大きさを持つ、巨大な鯨がガジェットの群れを喰い荒らした。

たったの一撃で、ほぼ全てを持っていき、さらに制空権を確保した鯨斬はあくびをしていた。

私は茫然とした。はやてのところに繋げたが、全員目を疑うような光景を見た為か応答がない。

向こう側から、桜色の魔力光が見えたので、なのはに駆け寄った。

「なのは！」

「フェイトちゃん！」

「一緒に鯨斬さんの元に行こう。」

「うん。」

あの鯨について、問いたさなきゃ。

＼フェイトside out＼

＼はやてside＼

「なんや・・・アレ」

「今見てる映像が嘘であってほしい。」と何度も頭の中で囁かれた。

「あれは神海少将の使い魔でしょうか？」

とグリフィスくんは冷静を装いつつ聞いてきた。

「あんなのが使い魔だったら、きちんと申してあるはずです！」

シャーリーは叫んだ。

「あり得ない・・・」

そう、この光景は「あり得ない」。たった一言でこの状況は説明できる状況だった。

「シャーリー、通信開いて。」

「へ?。」

「通信や！鯉斬さんに直接問います！！」

「あ、はい！！」

『・・・なんだ』

「なんですか！！アレは！！！！」

『色々省けば、俺の使い魔になるのかな？』

「その“色々”の部分がじっくりと聞きたいですね。」

『話して、どうする？・・・機動六課の後見人のクロノ提督とリンディ提督に話すか？』

「・・・何故、知っているんです？」

『お前、バカか？知ろうと思えば情報なんていくらでも手に入るんだぜ？』

ちよつと、カチン！と来た。

「ええ、話します。そんでもって意地でも話させてもらいます！」

『その会談、実に楽しみだな。』

「“楽しみ”ではなく“マズイ”の間違いじゃありませんか？」

『ハア、こんなこと言いたくないんだけどよ。・・・お前らだけが有利ってわけじゃないんだぜ？』

「・・・どういことです？」

『・・・この部隊設立に俺達地上本部が気が付かないと思ったのか？』

「それはどういう意味です？」

『先程、クロノ提督とリンディ提督が後見人と言ったが、違うよなあ？あと三人ほど居るってこと俺は知ってたんだぞ？』

「・・・っ！？」

『さてと“コレ”がバレたら、地上本部はあきらかにこの部隊を見張るよな？「機動六課は何かを隠してる」などの想像が簡単に思いつくか。しかもこの部隊は管理局でも一位、二位を争う程の戦力とメンバーが居る。・・・ここまで言えば・・・分かるな？』

「・・・・・・・・・・」

私は答えられない。

『黙っている。ということは肯定ということか。』

私は思いつき、鯉斬さんを睨みつけた。

「貴方は何がしたいんですか!？」

『別になにも?』

「・・・・はい?」

『俺の事について余計な詮索をするな。かな?言うとなれば。』

「それだけですか?」

『それだけだ。会談するなら日程を教えてください。・・・ああ、実に
楽しみだ。』

と挑発して、鯉斬さんは通信を切った。

「これやから、地上本部の人間は嫌いなんや・・・」

くはやてside outく

ファーストアラート 前編（後書き）

最初に事件で鯉斬の立場があやふやになってきました。さて、どうなるやら・・・。

あ、言っておきますが、『覚醒セシ者』で出た最初の会話はメガロではありませんよ？

海竜神・・・鯉斬が体の中に宿す者。正式名称はリヴァイアサンだが長いので別の名で呼ぶこととなり、愛称はメガロ。

ファーストアラート 後編（前書き）

ファーストアラートはこれで終わりです。
この先のお話はしばらく鯨斬のターンです。

ファーストアラート 後編

くスバルside)

無事、私たちがリニアに着地出来た時に八神部隊長と鯉斬さんの通信が終わり、リイン曹長が降りてきた。

「まったく、鯉斬さんはいり得ないですよ。」
と立ちを呟いていたが、すぐに切り替えて私たちに任務の説明を行った。

「では、今回の任務はスターズのお二人とライトニングのお二人が前後から進み、七両目の重要貨物室から“レリック”を確保することです。・・・私はリニアの制御を奪い返しますので、四人で頑張ってもらいます。途中、ガジェットの妨害などがありますので、気を付けてください！」

「「「はい!!」「」「」」

そのとき、この車両の真下に居たガジェット達が天井に向けて撃ってきた。

「うおおおおお!!！」

ドゴォン!

ガッ!

「でえええええい!!！」

《Wing Lord》

「わわっ!!！」

私は中に居たガジェット数機を破壊し、その反動で外に投げ出されたとき、足元にウィングロードが出現し、それを走ることによって再びニアの天井に戻ることが出来た。

「・・・マツハキヤリバー？」

《どうしました？》

「今のはマツハキヤリバーがやったの？」

《そうです》

「凄いよ、マツハキヤリバー！！」

《私はあなたをより強く、より速く走らせる為に作り出されました》
「・・・マツハキヤリバーはA Iで動いてる“デバイス”だけどさ、私はそういう風に考えないで“相棒”って考えてるんだ。」

《“相棒”ですか？》

「うん、私もマツハキヤリバーも雛鳥なんだからさ、一緒にレベルアップしていこうよ！」

《・・・そうですね。》

そんな話をしながら、目的地まで進んでいった。

くスバルside outく

くティアナsideく

私はスバルが破壊した後、車両内を進んでいた。

「しかし、貴方達は凄いわね。」

《お褒めに預りて光栄です。》

「本当は私のような“凡人”は貴方のような優れものには頼りたくないんだけど・・・」

《要りませんでしたか？》

「だけど、共に現場を駆けるパートナーだし、頼りにしてるわよ？
クロスミラージュ。」

《任せてください》

その時目の前に立ちはだかってきたガジェット達は一列になって襲いかかって来た。

「クロスミラージュ!!」

《バリアブルバレット!!》

「バリアブル・シュート!!」

ズ・・ガガガガン!!

一列になって襲いかかって来たガジェット達は一発の弾丸によって貫通され爆発した。

「この調子で行くわよ!」

《イエス、マスター》

＼ティアナside out＼

＼エリオ・キャロside＼

僕たちも無事着地した。

リン曹長の話も聞き、途中何機かガジェットを破壊したが大きな怪我はなく順調に進んでいた。

だけど、目的の重要貨物室前の車両に着いた時、今までとは見たことのないガジェットが現れた。

「大きい!」

「エリオ君!!」

「大丈夫!」

「でやあああ!!」

新型のガジェットにぶつかる瞬間、AMFが発動し、魔力刃が掻き消されてしまった。

そして、後ろにいたキャロのところまで届いていた。

「くっ！AMFの範囲が広い！！」

「これだと、ギリギリ届かないところから撃つしかないけど、そんなことをしても威力は無くなる・・・。」

「やっぱ僕が一気に近づいて、斬るよ・・・！！」

と充分に距離を離していた二人だったが、新型ガジェットのアームが二人を襲った。

キャロはそのまま後ろに下がったが、エリオはキャロが後ろに居た為、防御するしかなかった。

「エリオ君！！」

「ぐう！！」

エリオは必死に投げ飛ばされないように抵抗しているが、それも限界だった。

新型ガジェットはアームを槍に巻きつけ、そのまま壁に叩きつけた。

「があ！」

「・・・・・・」

新型ガジェットは邪魔者をこの場から排除しようとエリオを車両から投げ飛ばし、エリオはそのまま崖下に落下していく。

キャロは、無意識にエリオの元に向かって行った。

「（護りたい。）」

私の行き往く場所は常に安定した場所ではなかった。

自分が持つ力に振りまわされ、そのたびに居場所を追われていた。

だけど、最後に辿り着いた場所はそんな操れない力があっても、気さくに手を差し伸べてくれる場所だった。

だからこそ、護りたい私に手を差し伸べた人を・・・護りたい！！

「今まで、辛い思いをさせてごめんね。・・・フリード、いくよ！」

「きゅる〜！」

『竜魂召喚!!』

『蒼穹を走る白き閃光、我が翼となりて天を翔けよ。来よ、竜フリードリヒ。竜魂召喚!!』

と力強く、唱えた瞬間、小さかったフリードは本来の姿になって、リニアの横に付きながら、空を飛んでいた。

「・・・うん？」

「よかった、目を覚ましたんだ。」

「わわっ!? キャロ、それにフリードまで。」

「行こう、エリオ君。ガジェットと一緒に倒そう。」

「うん。まずはあの装甲をどうにかしないと・・・」

「エリオ君はあのガジェットを倒すことに集中して。」

『我が請うは白銀の剣、若き槍騎士に祝福の光りを』

《Enchanter .. Field invalid》

『猛き、その身に力を与える光りを』

《Boost up .. Strike Power》

『《Twin Boost .. Slash and Strike
e》』

その力を受け取ったエリオとストラードは一気に新型ガジェットの懷に潜り込みAMFを破壊した。

「一閃！必中！！」

「どりゃああああ！！！！」

キャロとキュリケイオンで強化された槍はガジェットに突き刺さり、そのまま一刀両断された。

＼エリオ・キャロ side out＼

＼鯨斬 side＼

スバル達の初戦闘が終わり、力を使うことに躊躇っていたキャロは無事に力の制御も出来、“レリック”も無事に回収できたらしい。だが俺は見守っていた時、空に浮かんでいるサーチャーを見つけた。このサーチャーはステルス性能が付いている為、そう簡単に見つからないが、コレを作成したのが俺とアイツだったからだ。俺はこのサーチャーをなのは達に見えないように回収した。そして、カメラ越しに……。

＼鯨斬 side out＼

＼???? side＼

「……刻印ナンバー9が護送されましたが、追加戦力を送りますか？」

「いや、いいよ。今回はこの子達が見ただけでも良しでしょう。」
と言って、画面には先程私が作成したガジェットを破壊していく機動六課のメンバーが映っていた。

「……フフ、『Fシリーズ』がまだ居たとは……。そして。」
再び画面が代わり、映し出した人物は黒と蒼のBJを着た人物だった。

「・・・まさか、鯉斬さんがこの部隊に居るとは・・・縁があるんじゃないんですか？ドクター」

「そうかもね。ウーノ。」

その時、サーチャーの画面がブレ、直った時にはある人物がカメラ越しの僕達に向けて言い放った。

『一体何をしてやる？・・・ジェイル』

＼ジェイル side out＼

ファーストアラート 後編（後書き）

今回は新人四人達のそれぞれの戦闘描写にするつもりだったんですが、エリオとキャロだけは難しかった。

そして、最後に鯨斬の友人であり、仲間でもあるジェイルの登場。

ここ最近、思った事。

エロネタやギャグを書いていると、シリアスが凄く書きづらい！

訪問（前書き）

いやあ、二日も空けて申し訳ない。
一気に投稿じゃー！ヒヤッハー！

訪問

く鯉斬sideく

「一体何をしてやがる?・・・ジェイル」

そういった俺は覗きこんだが、一方通行の会話だと思いだし、そのまま続けた。

「これを使ってお前のところ行くから、待ってろ」

そう言って、サーチャーをなのは達にバレないように隠した。その後、すぐにはやてから通信が来た。

『鯉斬さん、ご苦勞様でした』

「おう。現場の保存とかは誰がやるんだ?」

『ライトニングの二人がやります』

「なら、俺は用があるから先に離脱していいか?」

『一体どこへ?』

「・・・上司のところだ」

『分かりました。あとはこちらでやっておきます』

「じゃ、通信終了」

ピッ!

「なのはにフエイト、俺は寄るところがあるから先に出るぞ!」

「へ?」

「じゃあな!」

「あ、ちょ、鯉斬^{さん}?!」

そう大声で叫んだ後、その場を離れた。

く鯉斬side outく

＼ジェル side＼

彼がこの場所に来ることを知った私は、準備をしていた。

「ウーノ、鯉斬が来るから準備をしよう」

「準備って何をするのですか？ ドクター」

「何って“歓迎”の準備に決まってるじゃないか！」

そう言って私は笑っていた。

「鯉斬様、すみません。止められませんでした」

そう呟くウーノはジェルがやっていることを眺めてみることにできなかった。

＼ジェル side out＼

＼鯉斬 side＼

サーチャーの後を着いていく俺。

「ここがアイツの本拠地か・・・」

サーチャーは洞窟の中に入っていた。

「お邪魔します！」

そういつて入った瞬間、横の壁から「ビュッ！」と何かが通り過ぎ、慌てて避けた。

「うおっ!？」

ビイイイイイン・・・

矢が突き刺さっていた。

「……………ジー（　　）。」
目の前の通路を見ると、至る所に罠（笑）が仕掛けられていた。

「……マジかよ」

地面にも何か怪しいセンサーが付いていたので、そこらへんの石を試しに投げてみた。

「コンッ！」と石が地面に当たった瞬間、予想以上の後が鳴り響いた。

ジャキン！

↑地面から棘が出てきた

ピガガガガ！

↑どこからもなく電撃発生

ゴオオオオオオ！！
きた

↑その両サイドの壁から火炎放射器が出て

ギュイイイン！！
てくる

↑その先に円状の仕込みカッターが飛び出

ガチンガチン！！

↑壁から棘が生え、高速で狭まってくる

ドスンッドスンッ！！

↑それを通り抜けたら、今度は天井プレス

「……………」

投げた石は欠片すら残さず綺麗に消え去った。

「逝くぞ！！」

その後、通路には「戦闘があつたのか？」と言われるほどの轟音と爪痕だけが残った。

（鯉斬side out）

（ウーノside）

「お邪魔しまーす」という声が微かに聞こえた。

鯉斬様が来たことが分かり、ドクターの仕掛けた罠をいとも簡単に

掻い潜ってやってくると思いましたが、いつまでも姿を現さず、聞こえてくるのは轟音と悲鳴の二つでした。

「あつ、ちょ、コレはやり過ぎだろ!？」

ドガアアン!

「ヤバイヤバイ!!」

ギユイイイン!!

「うおおおおおお?!!」

ヒュツ・・・ダダダダダダダダ!!

「死ぬ死ぬ死ぬ!!」

そんな声が聞こえてきた後、罨をやつとの思いで掻い潜って来た鯉斬さんの姿が見えました。

くウーノside outく

く鯉斬sideく

「だ、大丈夫ですか?!」

「ゲフツ、効いたぜ。あ、ようウーノ」

「お久しぶりです、鯉斬様」

「“様”は付けるなって言ってるだろ?」

「まあ、癖みたいなのなので・・・」

「取り敢えず、アレを仕掛けヤツはドコ行った?」

「奥に居ます」

ガコンッ……

「「は？」」

立ち上がろうと地面に手を付いた瞬間、手を付けた部分が凹んだ。

ゴゴゴゴゴゴ……

上から音が聞こえるので見てみると、とてつもなくバカでかい木製ハンマーが俺達に向けて、振り降ろされていた。

「ちよつとマテやあああああー!!」

一人ならどうにか脱出できたが、今はウーノが居るため出来ない……。

ブチッ!

「調子乗ってんじゃねえぞ、ゴラァ!!」

激怒した俺は無意識のうちに、右手に四十五口径シールドバンカー

「リボルビング・ステーク」を装備して、全弾叩き込んだ。

「往くぞ、ウーノ。アイツには睨が必要だ」

「ええ、そうですね」

俺たちは頷き、奥で待っているジェイルの元に向かった。

「鯨斬side out」

「ジェイルside」

鯨斬がこの部屋に入って来たので、クラッカーを鳴らしたがどうやら二人はそんな気分ではないようだ。

「どうしたんだい? 二人して意気消沈して」

「解れ、バカ！　つか、なんだあの罨の数と威力は！？」

「僕なりの歓迎だよ」

「死ぬわ、ボケ！」

「だが、実際に生きてココに居るじゃないか」

「オマエ、喧嘩売ってるんだな？　そうなんだな？　買ってやるから表に出ろや、コラ！！」

「まあまあ落ち着いて、ウーノが淹れたコーヒーでも飲みたまえ」

「あ、どうも」

ズズズ・・・

「美味い。ウーノまた腕を上げたか」

「有難うございます」

「じゃ、なくて！！　コントをやりに来たんじゃねえよ、俺は！！」
自然とコントをしてしまった。

このノリについて来てくれるとは、やっぱり面白いなあ。

＼ジェイルside out＼

＼鯨斬side＼

コイツのペースに乗せられたら、話しが進まなくなるので諦めることにした。

「もういいや、疲れた」

「それよりも、久しぶりだ。鯨斬」

「・・・おう、ジェイルも元気だったか？」

「まあ、妹達シスターズが居るからね、賑やかだったよ」

「ドゥーエは相変わらず、潜入中か？」

「ああ、脳髓どもの元でね」

「アイツに何か買っておこうかな、迷惑かけてるし」

「喜ぶものは何だっけ、ウーノ？」

「靴とかバックがよろしいかと・・・」

「やっぱ、女の子だね。ウーノもな」

「そうやって、妹達シスターズを誘惑しないでくれるかな？」

「父親みたいなこと言うなよ。ところでその“妹達”シスターズは今どこに？」

「訓練場です」

「・・・それってどこにあるんだ？」

「通路の途中を左に曲がった・・・あ」。

「どうやら、気がついたらしい。」

「この後、何が起るのかを。」

「現に遠くから悲鳴が聞こえている。」

「・・・なあ、ジェイル」

「・・・なにかな、鯉斬？」

「オマエ、罠トラップのスイッチ切ったか？」

「・・・・・・悪いね☆」

「どーすんだ、アレ？」

「と言ってモニターを見ると、“妹達”シスターズが先程の俺よりも酷い状態で突破している。」

『あ、ちょ、コイツはやばいッスよ！』

『あん、痺れる』

『くっ！ これでは突破できん！』

『うおっ?! 危な!』

『ギャアアアアアアア!』

あ、一人やられた。

突破した後高速でこちらに来て、ジェイルに詰め掛けている。

「「「「「ドクター!!!!!!!!!!!!!!」」」」」

「なんですか！ あの罨は！？」

「死ぬかと思ったツス！！」

「つーか、やられたし」

「・・・ひどい」

「何するんですか！！」

おお、怖い。

「ちよ、ちよっと鯉斬にウーノ！ ヘルプ、ヘルプ！！（。D」

助けを求めるジェイル。

こっち見んな。

「どうする、ウーノ？」

「助けないで、鯉斬さんとのんびりしてます」

「だ、そうだ。俺はウーノの意見を尊重するから」

「あ、ちよ、ギャアアアアアア！！」

しばらくお待ちください・・・。

袋叩きされたジェイル。

そこによりやく知らない相手が居ることに気がついた妹達シスターズは訪ねてきた。

「ウーノ姉様、あの彼は？」

「この方はドクターの友人であり、『計画』の協力者でもある神海鯉斬様よ」

「神海 鯉斬だ。よろしく頼む」

じろじろ見てくる妹達シスターズ。
なんですか？

「ほら、あなた達も自己紹介しなさい」

「・・・トーレだ」

「クワットロよん、よろしく」

「チンクです」

「セインです」

「セツテです。よろしくお願いします」

「僕は・・・オットー」

「・・・ノーヴェ」

「・・・ディエチ」

「ウエンディッス！」

「ディードです。よろしく」

と順番に挨拶する。

「鯉斬さんは・・・どんな方なんですか？」

「というと？」

「管理局の方ですか？」

「まあ、そうなるな」

「「「「っ?!」」」」」

「そう、構えるなよ。確かに管理局の人間だが、お前らが想像してるタイプじゃないぞ？」

「どういうことだ？」

「簡単だ、トーレ。俺は管理局に復讐する人間だからだ。大体、『計画』の話を持ちかけたのは俺だしな。もっとも、同じことを考えていたがな」

「・・・そう言えばそうだったね」

「ジェイル、起きたのか」

「いや、結構効いたよ」

「自業自得だ」

「というか、俺達最初なんの話をしてたんだっけ？」

「なんだったかな? ウーノ」

「確か、ドゥーエのプレゼントの話だったハズですが・・・」

「ああ、そういやそうだった。なんでこんなに話しが脱線してんだ？」

「全てはドクターの悪ふざけが原因ですね」

「ウーノ・・・お前苦勞してるな。お前にも何か買っておくよ」

「有難うございます」

全く状況が読み込めない妹達であつたが、たった一つの単語を聞きとつた瞬間、話しに入りこんできた。

「ウーノ姉様と誰にプレゼントするんですか？」

「なんだ、いきなり？」

「鯉斬兄も甘いッスね！ 私たちは女なんですよ？ それぐらいは氣にするッスよ！」

「鯉斬兄？」

「なんか、お兄さんって感じがするんすよ。だから、鯉斬兄と呼ぶせてもらうッス！」

とウエンディはフレンドリーに呼んでくる。

それを聞いた他の奴らも頷いていた。

「あー、確かにそれ、分かる気がする」

「「「「確かに」」」」

「・・・ウーノがオシャレして、鯉斬さんがスーツとか着て夜の街を歩いていたら、恋人っぽく見えるしな」

とトーレですら言う始末。

その光景を想像したウーノは顔を赤くし、他の奴らも自分たちに当てはめて想像してるようだ。

「本当に誘惑しないでくれよ？ 鯉斬」

「俺はなにもやってねえ！！」

「・・・と、ところで鯉斬様は今日の予定は？」

「もう何も無い筈だ……。三日間ぐらい暇だな」

「なら、ここで暮したらどうだい？」

「マズイだろ、それ」

「僕やウーノは構わないよ。……キミたちは？」

「ドクターがいいなら構わないです」

「じゃ、決まりだね。……ちなみに彼はこんなナリでもガジェツトを素手で破壊するから、気を付けてね？」

「「「え」」」」

「……見てたのかよ。まあ多少は鍛えてやるよ」

（鯉斬 side out）

こうして、俺は三日ほど、ここで暮らすこととなった。

訪問（後書き）

戦闘機人であるシスターズでさえ、驚きの戦闘法。

原作ではノーヴェ達のもっと後に、出てくるはずですが、この物語は早くから登場です。

・・・オットーとディエチの口調が分かんねえ。

強化

「鯉斬side」

うい、鯉斬だ。

あれから二日経ち、妹達もだいぶ鍛えられているよ。^{シスターズ}

といっても、俺の牙や岩石をブン投げたり、レイヤード・クレイモアを片っ端からぶっぱしてるのを避けたり、受け止めたりしてるだけなんだけどね。

ちゃんと、ソレを避けて接近戦もやってるけど、俺の元に辿り着くまでにほぼ力尽きてる感じの為、まともな接近戦はほぼない。

時折、「手を抜いて欲しい」と言われたが、「手を抜いたら鍛える意味がないだろうが、バカ共」と言っってそんな願いを一蹴した。

「……………さて、今日もここまでだ。ちゃんと体を休めろよ」

「「「「「あ、有難うございました……………」」」」」」

「おう。ご苦労さん」

ウーノを除くシスターズはいつものようにぐったりしていた。

俺は部屋を出て、ジェイル達が居る部屋に向かった。

「ジェイル、居るか？」

「おや、訓練は終わったのかい？」

「ああ、今終わった」

「毎度のことながらスパルタだね、キミの訓練方法は…………」

「何を今更なこと言っただ、お前は…………」

「ところで、なにが僕に用があったんじゃないか？」

「おお、そうだった。…………ちよつと、強化してもらいたいんだが出来るか？」

「内容によるが……何をだい？」

「……俺の特殊武装を強化してもらいたい」

「特殊武装って言うと、あの武装かい？」

「ああ、俺が頼むのは“武装融合”だ」

「武装融合？」

「俺の持つ『パルチザン・ランチャー』ってあるだろ？ アレは魔力弾と質量兵器の複合体だ……そこで俺はそれを一つずつに分けて他の奴とくつつける事は出来ないのか？ とね」

「なるほど…… 面白そうだし、なにより科学者として血が騒ぐ！」
「じゃあ、やってくれるか？」

「もちろんだとも！！ で、融合させる武装は何かな？」

「まず『パルチザン・ランチャー』を二つに分ける」

「それは、デバイスを壊すんじゃないのか？」

「いや、それがどうも違うらしい。ジョーカー」

《OK・モード『ヴァイスリッター』！！》

ジョーカーが呼び出すと、何もないところから転送される形で出現した。

「なっ！？ いきなり出現した？！」

「どうやら、この特殊武装は別空間に保管してるらしく、そこから取り出されるらしい。……俺もここ最近ようやく知ったんだ」

「ふむ…… これならいけそうだね」

「そうか、次に融合させる武装だが質量兵器の方には 四十五口径『リボルビング・ステーク』を魔力弾の方には『グラン・スラッシュリッパ』の刃を弾丸に変えて、後、銃剣にして欲しいんだが……出来るか？」

「……早くて二日、遅くても三日くれないか？」

「別に構わないぞ」

「なら、詳細を詳しく話してくれ……」

「ああ……」

そう言って、俺はジェイルと共に研究室に向かった。

おっと、いけない伝え損ねていた。

「ウーノ！」

「はい、なんでしょう？ 鯉斬さん」

「アイツ等が来たら、食堂に行けと伝えてくれ。料理を創っておい
た、あと、ウーノにもすぐそこに置いてあるよかったら食べてくれ
！！」

「有難うございます、伝えておきます」

そして、今度こそ俺は研究室入った。

（鯉斬 side out）

（ジェイル side）

先程訓練を終えた鯉斬が私に頼みごとをしてきたので聞いてみた。

「なにか僕に用があったんじゃないか？」

聞いてみると、どうやら鯉斬の特殊武装を融合させたいと言っ
てきた。

でもそれはデバイスを壊す行為のではないのかと思い、訪ねてみる
とどうやら違うみたいだ。

「ふむ…… これならいけそうだね」

これは凄い！

こんなことが出来るなら、“武装融合”も出来る筈だ！！
さっそく取り掛かるべく、研究室で詳しい武装内容と強化する部分
を聞きながら改造しよう。

そこから、僕と鯉斬は二日間研究室に籠りっぱなしだった。

（ジェイル side out）

（ウーノ side）

鯉斬さんとドクターが研究室に籠った後、妹たちはやってきた。

「あれ、ドクターと鯉斬兄は？」

「あの二人なら研究室よ、鯉斬さんの斬新な考えによって籠るらしいわ」

「なんですか？ その“斬新な考え”って？」

「なんでも鯉斬さんの持つ、“特殊武装”を他の特殊武装と融合させるらしいわ」

「そんなことが出来るのか？！」

「それをやる為に、あの二人は籠っているのよ。あと、鯉斬さんから伝言よ。」

食堂に行けば、料理を創ってあるから食べなさいだって」

「「「「「「！？」」「」「」「」」

ダダダダダダダダッ！！！！

一人を除いて、皆は私が言い切る前にはもういなくなっていた。
少しでも多く食べたいらしく我先にといったようだ。

「まったくアイツ等と来たら……」

「あら、貴方はいいの？ トーレ」

「私にあんま空いていない」

「なら、軽くつまむ？」

そう言っ、後ろから私ように創られた料理をトーレに出しながら……。

「ウーノ、これは？」

「私用に鯉斬さんが創ってくれたのよ」

「いいのか？ 私が食べて？」

「構わないわ、一人で食べるのにはちよつと、量が多かったのよ」

「なら、次回から鯉斬に言っておけば、ちゃんと創ってくれるんじゃないか？」

「そうするわ」

そうして、私たちは鯉斬さんの手料理をいつもどおりに楽しんだ。

（ウーノ side out）

（鯉斬 side）

二日経ち、俺はここを帰らなければならぬが新武装の方はあと少しで出来るらしい。

「悪いが、俺はもう帰らないとさすがに怪しまれる」

「わかった、出来次第そうだな……ウーノに届けさせるよ」

「分かった……ウーノ、買った服ちゃんと着ろよ？」

「はい、分かりました」

「じゃ、トーレ達もまた会おう」

「デバイスの方は未だに預っているから、セイン送ってやってくれ」
「はい」

「クラナガンまでいいぞ」

「そこまでいいの？」

「さすがに本部まで来たら、ヤバいだろ、そっちの身が……」

「あ！ そうだね!!」

「じゃあ、また会おう!!」

「行ってきました!!」

そうして俺はセインに送ってもらい、クラナガンで別れ、機動六課に着いた。

その時の“お迎え”が尋常じゃなかったが……

（鯉斬side out）

強化（後書き）

特殊武装の強化のお話。

そして、ウーノのキャラ方向性がおかしいような・・・

事前に連絡は入れることにしよう

（鯉斬side）

いきなりだが、言っていないか？

歸りてえ……。

目の前が凄いんだよ、なんつーの？

黒いオーラが見えるんだよ、それもまだ“三人”ならよかったんだけどね。

何か知らんが予想外の二人が居るんだ……………。

なんでココにハラオウン一家が勢ぞろいしてんの？

そんなことを考えていたら、見つかった。

「あー！！ 鯉斬さんだー！！！」

「ヤベっ！」

咄嗟に逃げようとしたが何時の間に俺の後ろにはフェイトが居た。

しかも、ソニックムーブモードで……。

オイ、それは緊急用じゃなかったのかよ？

というか、この姿のフェイト結構好みかも……。

「三日間どこに行ってきたのかな？」

「そうだよねえ、連絡なしに三日間も」

「そうやなあ、部隊長に申告無しに無断欠席、職務怠慢やなあ？」
うおっ？！

いつの間にか囲まれてるし！

「一応言っただんですが？ 『俺、行く所がある』 って」

「でも、場所までは聞いてへんですよ？」

「そこまで教える必要がないな」

「……なんで？」

「お前らにも“誰にも知られたくない秘密” ってのは持っているものだろう？ それと一緒にだ」

「……鯉斬さんはズルイね。私たちが何も言えなくなることを武器にして使ってくる」

「なんとでも言え。……で？ そちらの二人はなんで居るんスか？」

「鯉斬さん…… 自分で言ったことを忘れましたか？ 『会談するなら日程を教えてください』 って」

「ああ。なるほど、それが今日ってことか？」

「そうです」

「なら、始めようとするかね」

なのは達の尋問をゆらりくらりかわして、本番に臨んだ。

……新デバイスまだかな？

く鯉斬side outく

くウーノsideく

今、私は鯉斬さんが買ってくれたら衣服を着てます。

「ウーノ姉、いいッスかあ？」

「……ええ、いいわよ」

カーテンを開けるウエンディと私の姿を一目見ようと他の妹達が集まっていた。

「」「」「おおおおくくく！」「」「」「」

「ど、どうかしら？」

「「「似合ってるよ!!」「」「」

「ありがとう／＼／＼」

「…はい。これ鯨斬に渡して来てくれ。……それと少し羽根を伸ばしてくるといい」

「いいのですか？」

「たまには休みなさい」

「では、そうさせてもらいます」

「セイン、送ってあげて」

「はいよう。んじゃ、行くよ？ ウーノ姉」

「ええ、お願い」

そうして私は鯨斬さんがいる機動六課に向かった。

「ウーノside out」

「リンディside」

はやてちゃんがいきなり呼んだ時は何事かと思ったけど、これは随分と厄介な人に嗅ぎつかれたわね。

まさか、地上本部……。しかも、レジアス中将の直属の部下の人なんて……。

気を引き締めないと一撃で持ってかれそうだわ。

「こんにちは、私がリンディ・ハラOWN総務統括官です」

「そして、僕がクロノ・ハラOWN提督であり執務官だ」

「どーも」

軽い気持ちで挨拶している割には隙がないわね。

「自己紹介ぐらいしなよ、鯨斬」

「ウィ。元地上本部で“レジアス中将の部下”でもあった神海 鯨

斬少将です」

とワザと一部だけ強調して言ってきた。
舐められてるわね…………。

「どうも御親切に」

「いえいえ、お気になさらず結構ですよ？」

どこまでもおちよくろうとする態度にクロノは我慢しているわね。
……これは、近いうちに爆発するわね。

「ま、何時までも雑談ばかりしているわけにはいかないし、本題に入りましょうかね？」

「ええ、そうね。…………では鯨斬さん、貴方はどこからこの部隊設立の……ことを知りましたか？」

「直球ですね。変化球が来ると思ってたんですが…………」

「貴方に変化球なんて投げたら、投げ返されるのが目に見えていますからね」

「ふむ。どう答えようかね？」

「障りの無い答えで結構ですよ？」

「そうですね…………。どんな組織でも大きくなるほど情報の管理は皆さんになります、そこから情報を得た。とでも言っておきましょうか…………」

「…………なかなか意味深な言い方してくれるじゃない」

「お褒めに預り、恐悦至極です」

「では、他には？」

「そう簡単に言うと思いますか？」

「…………でしょうね」

「俺は貴方達が知られたくない情報が武器になるんですから、持っているだけでも充分牽制にはなる。——違いますか？」

「ええ、そうね」

「母さん！ 認めるなんて!!」

「クロノ。ここは認めましょう。言い争えばこの人を有利にするだけだわ」

「そうだぞ、クロノ？ 成長したと思ったんだが、まだまだ甘いな」

「なんだと?!」

クロノを怒らせてさらに情報を引き出すつもりね。

「今、ココでキミを解雇することも出来るんだぞ？」

「おやおや、脅しですか。まあ、別に解雇してくれても構いませんよ？ ただ、私を解雇したら“予言”を止めるのは大変でしょうね」

「「「「!?!?」」」」」

何故、“予言”の事を彼は知ってるの?!

あの“予言”は限られた者しか知らないハズなのに……

これは不味いわね……。

＼リンディ side out＼

＼鯉斬 side＼

おーおー、“予言”のこと言ったら皆吃驚してるよ。

「なんで知ってるんだ？」みたいな顔をしゃがって、俺これでもレジアスの部下だったんだぜ？

知らないわけなからうが。

「おっと、口が滑ってしまいました。今のは忘れてください」
そう言っても凄く睨んでくる五人。

「キミはどこまで知ってる！？ 内容によっては……」

「内容には何だって？」

「今のキミには理由は分からないがデバイスがない。黙らすことも……調子に乗るなよ」……っ!？」

「(メガロ、合図を待て)」

『ああ。分かった』

メガロに喰わせる合図を待たせてクロノと対峙する。

「調子に乗るなよ、小僧！ テメエ等が有利とか思ってたんなら大間違いだぞ!？」

「なんだと!」

「テメエ等はすでに喰われそうになってんだぞ？ 航空ガジェットの大群をたった一回で屠った海竜神を相手にお前は勝てるのか？」
そういうとリンディ、クロノを除く三人は動きを止めてしまう。

「なのは達は知ってるよなあ？ アイツの大きさや破壊力を」

「「コクコクコク………!!」」

無言で頷く、三人。

三人の見慣れない動きからリンディ達は動けずにいた。

そのまま、気まずい空気が流れると、この部屋に一人の女性局員が入って来た。

「神海 鯉斬少将は居ますか？」

「あ、はい。何ですか？」

「少将に面会したい方が来ます。………若い女性ですよ」

「分かった、すぐ行くから。場所は？」

「ロビーです」

「分かった。「五分ほど待ってくれ」と伝えてくれ」

「分かりました。では、失礼します」

女性局員は要件を伝えると去っていった。

「会談をこちらから始めたのに悪いが、今日は人と会う予定が会ってな。悪いが失礼する。……そうだ、悪いがはやて。俺は上がらせてもらおうぞ」

部屋を出ていったあと、俺は私服に着替えてウーノの元に向かった。

鯉斬side out

ふフェイトside

私は女性局員のある言葉に聞きとめた。

『若い女性』

鯉斬が知らない女性と会う……………。

何故か知らないけど、凄く興味がある！！

なのはたちを見てみると二人も同じようだ。

お母さんは面白いネタを見つけたと言わんばかりの表情をしていた。

お兄ちゃんは……………未だに機嫌が直らないらしい。

「えーと、私も用事を思い出したので失礼しますッ！！」
そう言って急いで鯉斬の後を追った。

ふフェイトside out

フェイトが出て言った後にさらに大きな集団が付いていく姿を見たのは言うまでも無いことだった。

事前に連絡は入れることにしよう（後書き）

もうウーノが原作乖離している気がする・・・

ところでクロノってStSでは執務官と提督どちらでしたっけ？

知っている方いますか？

デート

＼鯉斬side＼

俺は管理局の制服から私服（ハザマが来ているスーツ）に着替えて、ロビーに向かった。

「よお、待たせたか？」

「いえ、待っていませんよ。……ドクターからです」

「悪いな、敵地のド真ん中まで持って来てもらって……」

「本当ですよ、その代わりに今日私をエスコートしてくれたら許しますよ？」

「なら、行きましようかね？ お嬢さん？」

「……………ええ／／／／」

手を取って、夜の街に出かけた。

＼鯉斬side out＼

＼フェイトside＼

鯉斬の後についていくと、それなりに高いスーツを着て、訪れた女性と合っていた。

訪れた女性は紫色の髪でお淑やかで美しい女性だった。

実際に、男性局員ならず女性局員までもが目止まるほどだった。

遠めなのではっきりとは分からないが自分と女性のスタイルを見比べたところ、スタイルは自分の方が若干勝ってる……と思う。

「……………あっ！」

鯨斬が私達にすら見せたことのない笑顔でその女性の手を取った。
その女性は若干頬を染めていた。
心の底から、表現できないが何かが燃えあがった。

この気持ちは何なのか分からないけど、鯨斬があ的女性と手を繋いでると羨ましく思う半分、気にいらない気持ちだ。

そして、移動する二人に気付かれず且つ離れない距離を保って追跡した。

「フェイトside out」

「機動六課十二人side」

「「わっ、鯨斬さん。かっこいい!!」」

「「……………ま、負けたorz」」

「今度、旦那に合コン頼もうかな？」

「神海少将も隅に置けないわね」

「「……………」」

機動六課のメンバーの内、はやとなのは、自分が築き上げたモノに罅が入って落ち込み。エリオとスバル、キャロは鯨斬の姿を見て、素直な感想を上げ、ヴァイスはいつも通りであり、リンディは順調に楽しんでおり、クロノとティアナは気にいらなかった。

そして、鯨斬が動き出し、それに合せてフェイトも動き、続いてな

のは達も動いた。

傍から見れば、怪しい集団である。

（機動六課十二人 side out）

（ウーノ side）

移動した私達は「プレゼントだ」と言って、服やバッグ、靴などを次々と買っていた。

「いくらなんでも買いすぎなんじゃ？」

「ウーノでもあるけど……トーレ達の分もあるからさ。まあ、そっちは一つしか買ってないけど勘弁してくれ。持ちあわせてないんだ」

「いえ、別にいいですけど……」

「そろそろ何か食べるか……。どこがいい？」

「私が決めてもいいんですか？」

「どうぞ……」

どうしようかしら……。

鯉斬さんの料理のレパートリーにイタリア料理とかは無かったわね。

「では、イタリア料理を食べてみたいです」

「イタリア料理か……。じゃ、行こうかね？」

店に入った私達は食事をして、白ワインを飲んで、全ての料理を食べ終わるときに私は見たことのある人物が居た。

その人達は金色の髪や栗色の髪、翠などと様々だった。

「……鯉斬さん、ここから離れたテーブルに職場仲間が来てますよ？」

「……知ってるよ、ここに来る前に気が付いた」

「……覗き見されてますね」

「……まあ、明日から俺が直々（・・・）に鍛えてやろうかね」

——どうみても、あの方たちは明日から楽しい訓練が始まりますね。
ジゴク

「さて、そろそろ出ようか」

「はい」

「………出たら、アイツ等を撒くから俺に掴まれ」

「分かりました」

会計を済ました後、片手で買った荷物を持ち、もう片方の手で私の腰に手を回し抱え込んだ鯉斬さんは少し歩いた後、いきなり右に曲がった後、一気に飛びあがり、建物の上に着地した。

追跡している方たちが、焦ってこちらに来てるのを上から確認出来た。

（ウーノside out）

（機動六課十二人＋フェイトside）

私達は鯉斬さんが料理店に入った後、フェイトちゃんと合流した。中で食事をしている二人が途中で恋人っぽいことをした時はフェイトちゃんを抑え込むのに苦労した。

二人というより、鯉斬さんが相手の女性に『食べさせる』という行

為をした時にはフェイトちゃんは身を乗り出して、今にでもトライデントスマッシャーを出しそうな雰囲気だった。

それ以外は無事に終わり、二人が店を出た後も追跡しようと思った矢先にいきなり右に曲がった為、慌てて追いかけた。

「「「「「「「あっ!!!!!!!!!!!!!!」」」」」」」

急いで追ったが、既に姿が無かった。

「……なのはさん……これバレたんじゃ？」

「……ま、まさか………バレたかな? (汗)」

「……もしバレていたら明日が怖いんですけど………」

ティアナの一言でフォワードメンバーと隊長たちは黙る。

「ま、まあ、大丈夫やろ」

「そ、そうだよね!」

「う、うん。さ、皆も帰ろうか……」

明日の鯉斬が、どんな表情するのが不安でしうがなかった機動六課メンバーは隊舎に戻ることにした。

〈機動六課十二人＋フェイトside out〉

〈鯉斬side〉

下の会話を聞いて後、セインとトーレを呼んだ。

「…………鯉斬さん、顔が怖いですよ？」

「え、ホント？」

「ええ」

「いやあ、明日が楽しみだな〜」

ええ、本当に楽しみDEATHね！！（超笑顔&怒）
そんなことを会話していると、セインとトーレがやってきた。

「早かったな」

「ウーノ姉、どうだった？ 鯉斬兄とのデートは」

「……………よかったわ／／／／」

「そうか。で、私達をよんだ理由は？」

「これを選んでもらいたいんだよ」

そういつて、プレゼントを渡す。

「こんなに買ったのか！？」

「シスターズ全員分だぞ？」

「えっ！？ あたしたちの分もあるの？！」

「ウーノは何個があるが、それ以外は一人一個だけど我慢してくれ」

「分かったよ」

「感謝する」

「では、鯉斬さん。また……………」

「ああ。ジェイルにもよろしく言っといてくれ」

「はい……………チュッ?! 別れのキスです／／／／」
いきなりキスされた。

思考回路ブツ飛ぶかと思ったがなんとか持ち直した。

「いきなりキスするとか、ウーノ……ファーストキスは大事にしろよ。……俺みたいな奴に捧げてどうするんだ」

「割と本気ですよ？ 鯉斬さん」

「いや、マジで困るから」

「じゃ、失礼する」

「鯉斬兄、じゃーね！」

「……はいはい」

そう言って、三人は帰っていった。

ウーノの事はちょっと置いて、今はあのバカ共をどうするか考えるか……。

ま、楽しい楽しい訓練シゴクはでもやりましようかね。

取り敢えず、『レイヤード・クレイモア』の嵐をぶっ飛ばしよう……

（鯉斬side out）

次の日の訓練は死屍累々になった。

シャルは不思議がってたが……

ホテル・アグスタ 前編

く鯉斬sideく

今俺達はホテルに移動中だ。

皆の顔はそれほどよろしくない。

なんでかって？

そりゃ、俺が直々に訓練官を買って出たからに決まってるだろ。

「……フェイト、言いたいことがあるんだろ？」

「……あ、うん。……皆には教えておくね。先日、ガジェットドローンの残骸データの中から有力な手掛かりが出てきてね。その候補者がこの人」

そう言って、モニターに出てきたのはジェイルだった。

「広域指名手配犯罪者、ジェイル・スカリエッティ。まあ、こちらの方は私が中心で調べるから皆は頭の片隅に入れておいてね」

「「「はい！！」」」

「でだ、今日行く所は………はやて」

「はいな。今日これから行く所はここ『ホテル・アグスタ』！ここはオークション会場となっていて、出品の中にはロストログアもあるからソレに反応してガジェット達が集まってくるかもしれないので警護することが主な仕事。私達、隊長達は中で守り、外はフォワード陣が守る。……わかったかな？」

「「「はい！！！！」」」

「あの………」

キャロがおずおずと手を上げた。

「シャマル先生、足元にあるのはなんですか？」

「ああ、これ？ 隊長たちの仕事着よ♪」

まあ、中に入るからな、局員の制服じゃあねえ？

「はやて、俺は外か？」

「いえ、最初は中に来てください、それからはこちらでも構いませ
ん」

「了解した」

もし、ガジェットが来たら新しい武装のテストを兼ねて的になって
もらおう。

＼鯨斬side out＼

＼はやてside＼

ホテル・アグスタに着いた後、私達は更衣室にいる。

「……フェイトちゃん、また胸大きくなってへんか？」

「……え？」

「……そういえばそうかも……」

「ちょっと触らせてえな……」

手をワキワキと動かしながら、近づくあたしにフェイトちゃんは後
ずさる。

「ちょ、ちょっとはやて?!」

「……なのはちゃん!! ホールド!!」

「わかったよ!!」

「……なのはまで!?!」
一歩また一歩と近づいていき、あとちょっとで廊下側から声が飛んできた。

「三人とも会話が漏れてんぞー?!」
「「!?!」」
その後、私達は急いで着替えて、外で待ってる鯉斬さんの元に向かった。

「「鯉斬さん!! 中の会話聞こえてたんですか!?!」」
「はあ? 聞こえるわけないじゃん」
「「「……へ?」」」
「いや、またはやてのくだらんことで時間食ってるんだろうな。と思ってカマ掛けただけだが……まさか、本当だったなんて言わないだろうな?」
鯉斬さん、アンタはエスパーか?
いや、それよりも!!

「鯉斬さん、よくも騙してくれましたね?」
「……なの」
「……鯉斬」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

「今のお前らにそんなこと言えんのか、コラ?」

「どう………いう事ですか？」

「ほう？ 忘れるとはいい度胸じゃないか、三人とも。………よくもついて来てくれやがったな、ええ、オイ？」

「「！？」」」

ま、まさかバレているとは………

「バレていないと思ったか？ 途中から気がつくわ！！」

「「……………ハハハハ」」

あ、アカン！

二人とも絶望の表情をしてる。

「二人とも気をしっかりしや！！ なんでそんなに絶望の表情なんや？！」

「はやては、知らないからいいんだよ」

「そうだよ。はやてちゃんは知らないから……………」

「なのはとフェイトは分かっているな。この警護任務、終わったら俺が直々にお前達を鍛えてやろう……（蝶笑顔）」

それを聞いた瞬間二人はドレス姿でorzになっていた。

二人とも器用やな。

「訓練内容ってなんですか？」

「ん？ ああ、簡単な模擬戦イジメだよ」

なんやろう、今、副音声がとんでもない発言だった気がする。

「と、取り敢えず………なのはちゃん、フェイトちゃん、見回りの確認を始めるで！」

「……はい」

「俺は？」

「私に着いて来てください」

そうして、私達は会場内の見回りをおこなうこととなった。

（はやてside out）

（ティアナside）

私達の今回の任務は警護任務だが、その事も頭に入れながら別の事を考えてた。

毎回思うけど、この機動六課の総戦力は異常ね。

八神部隊長がどんな裏技を使ったのか知らないが隊長格はオーバーSS+ランクもしくはSSランクが四人、リミッターを付けてもA+、それに八神隊長個人が保有している守護騎士四人、そしてフェイトさんの秘蔵っ子であるエリオと童召喚なんていうレアスキルを持つキャロ、そして私の相方のスバルは家族にも応援されながらB+ランクになりかけている……………。

「（やっぱり、私だけか。この部隊で“凡人”なのは）」

すぐにそんな気持ちを追い払った。

私は負けない。『ランスター』の魔法は凄いて事を証明してみせる！！

その時、警報がなった。

＼ティアナside out＼

＼鯉斬side＼

はやてに連れられて、あらかた見回りが終わった時にはやては目の前の人物に声を掛けた。

「……こんなところで何をやっているんですか？ ヴェロッサ・アコース監査官？」

「おや？ はやてじゃないか。それに………神海 鯉斬少将もご一緒のようで」

「………どうも」

「ここは何ですし、落ちついたところで話そうか？」
そう言って半ば強制的に喫茶店らしきところで俺達は座った。

「で？ 俺を誘った理由を言え」

「うーん、お茶を一緒にしたかった。じゃダメかな？」
このヤロウ………

「俺はまどろっこしいのが嫌いなんだよ。言いたいことがあればさっさと言え。………ああ、そう言えば俺の過去を調べたらしいですね！ アコース捜査官？」

「………どこでそんな事を聞いたのかな？」

「貴方が情報網を持つように俺にも独自の情報網があるんですよ」
「それは地上本部のオーリス・ゲイズ三佐からですか？ それともサラ・コーディネア一等空佐からですか？」

「さあ、どうだろうねえ？」

俺とアコースの腹の探り合いが未だに続いているが、埒が明かないと悟ったのかアコースがバラしてきた。

「……ええ、確かに私達は神海少将の過去を調べさせて貰いました。色々なことをね。出身地、家柄、過去の成績、噂、そして恋人のことも」

「…………へえ」

「神海少将、貴方、恋人を謎の事故で亡くしていますね？　その後、すぐに黒い噂が立ち始めた」

「……………それで？」

「（……ブレないな）噂の中には無視できない内容もありましたね。“神海　鯉斬は管理局の転覆を狙っている”などと言った噂がちらほらとありましたが、その辺についてなにか心当たりは？」

さて、どう答えるか…………。

答え次第じゃ、監視が付きかねないな。

回答に悩んでいた時、警報になった。

「（……助かったぜ）悪いが、ガジェットが出てきたみたいなんで前線に出させてもらおうぞ？」

「どうぞ」

アコースを通り過ぎる際に横目でちらっとみて、すぐに視線を外し、外に出た。

（鯉斬side out）

（アコースside）

彼が出て言った後、大きく息を吐いた。

「なんや、ロッサ。だらしがない」

「はやては感じなかったのかい？　僕が“恋人”を切りだした時の彼の圧力を？」

「いや、全然。……………凄かった？」

「対峙してみないと分からないよ、アレは。しかし、なかなかブレなかったな、彼は」

「……………鯉斬さんは“クロ”だと思う？」

「もうちょっと深く調べてみないと分からないね」

「そうか……………」

本当に彼ははやて達の味方なのだろうか……………

くアコースside outく

俺が外に出た時にティアナがミスショットして軌道が逸れ、スバルにぶつかりそうだったので、『グラン・パルチザン・ランチャー』で吹き飛ばし、ガジェットをついでに吹き飛ばした。

……………アイツ、なにやってんの？

ホテル・アグスタ 後編（前書き）

久しぶりです、二週間ぶりですね。

今回は案外戦闘より話の方がメインになってしまった。

ホテル・アグスタ 後編

く鯉斬sideく

ミスショットしたティアナの弾丸を飛ばし、ついでにガジェットも潰しておいた。

「ティアナ、お前何やってんの？」

「ち、違うんです！」

「何が違うんだ、言ってみろ。……………シャル、一人こちらに回せ」
『……………分かったわ』

シャルにこちらに一人回して貰った後、『グラン・パルチザン・ランチャー』をしまい、『パルチザン・ランチャー』を取り出して、待機状態にしながらスバルの答えを聞いた。

「鯉斬さん、これ、その……………そう、二人で考えたフォーメーションで……………！」

「ほう？ 敵味方関係なく撃ち殺すのがフォーメーション？ そんなに死にたいなら今ここで俺が殺してやるよ」

そう言って、『パルチザン・ランチャー』をスバルの頭に零距离で向けた。

「そうじゃなくて……………「お前ら二人、もう邪魔だ」……………そんな！？」

「聞こえなかったか？ もう一度はつきり言ってやる。“邪魔だ、失せろ”」

「……はい」

「……」

バカ二人を下がらせた後、パワーは幾分落ちるが『パルチザン・ランチャー』で残りのガジェット達を潰した。

途中、有人操作に切り替わったが、そんなの関係ねえ！！

ハイ、オッパッピー。

………なんか電波を受け取った、スマン。

最後は、エリオとストラーダが一刀両断して無事終わった。

（鯉斬side out）

（ティアナside）

あの後、鯉斬さんに「邪魔だ、失せろ」と言われた後、私達は裏に回された。

それから、少し経った後に戦闘が終わり、スバルが様子を見に来た。

「ティア、大丈夫？」

「え、ああ、うん。大丈夫。……アンタも検分に行きなさいよ」

「……でも」

「私、ちょっと一人になりたいから……」

「……うん、分かった。先に行ってるね、ティア」

そう言ってスバルを向かわせた後、一人トボトボと歩いていたが、歩きながら私の頭の中には鯉斬さんの言葉が響き渡った。

『敵味方関係なく撃ち殺すのがフォーメーション』

本来なら、あんなミスはしなかった筈だ。

スバルには当たらず、ガジェット達に当たる筈だった。

でも、あの時、鯉斬さんが撃ち落としてくれなかったら今頃スバルは――――

“死んでいた”かもしれない。

そう思うだけで体が震える。

私の…………『ランスター』の魔法で人が死ぬ。

自分が目指していたモノとは全くの別の結果を生みだそうとしていた。

その時不意に声を掛けられた。

「…………ティアナ」

振り返ってみるとそこには…………

「……………なのは隊長？」

が居た。

「少し私とお散歩しない？」

「はい」

私達はホテルに戻りながら、散歩した。

＼ティアナside out＼

＼なのはside＼

私が外に出ると、ティアナの姿が見当たらず、エリオたちに聞いてみると「鯉斬さんの指示で裏に回った」と言われたので、詳しい事情を聞いてみた。

聞いた後、ティアナを探し見つけた後散歩しながら諭してあげることにした。

「ミスしちゃったんだって？」

「……はい」

「鯉斬さんは厳しいからね。ちよつと言葉がキツイかもしれないけど、あの人なりの注意だと思ってね？」

「……はい」

「……私達のポジションはセンターガード。皆のサポートしながら、出来るなら射撃・砲撃もする為か、常に周りに気を使わないといけない。でも、今回ばかりはちよつと配慮に欠けていたね、以後気を付けること！ さて、説教はこれで終わり！！ しかし、優しいな

あ、鯉斬さんは」

「え、アレが優しいんですか？」

ああ、そう言えばティアナは知らなくて当然か…………。

あの最後の一カ月の地獄の訓練時代は…………

「私達…………つまり、フェイトちゃんと訓練校に居た時ね。残り、後一カ月つとときに鯉斬さんと冴姫さんが来てね。もう酷かったんだよ？ あの世界の訓練生は思い出すだけで気を失う人もいれば、『ごめんなさいごめんなさいごめんなさい』って呟く人もいるからねえ。今に比べたら、本当に優しいものだよ…………（遠い目）」

「…………ち、ちなみにどんなことされたんですか？」

「ちょっと暴走行為を行ったり、勝手に他人を危険に晒すような行動を起こしたら、即座に“牙”が飛んできたり、自慢の鉄拳制裁だったんだ。冴姫さんも冴姫さんで、雷の鞭で雷撃落としたり、炎の壁で逃げ道ふさいで鯉斬さんが『レイヤード・クレイモア』をぶっ放したりしてたから、死屍累々だったよ」

「……………（呆然）」

ティアナは目が点になった。

まあ、普通なら死んでるのが当然だ。

よくよく考えてみたら、私とフェイトちゃんよく生き残れたなあ…………

・（ホロリ）

「ま、まあ、そんなことがあったからね？ 優しい方なんだよ」

「……………そうですね」

ちょっと昔のトラウマを蘇しながら歩いていたら、ホテルの前まで来ていた。

「ティア〜〜！」

「スバル、迷惑かけたわね」

「大丈夫だよ、ティア」

「なのは、事後処理が終わった。撤収だよ」

「わかったよ……………」

「なのは、俺は先に帰るぞ？」

「あ、はい。お疲れ様」

「「「お疲れさまでした！！！」」」

「……………お疲れさまでした」

「……………」

鯉斬さんは何も答えずに去った。

う〜〜ん、ちょっと不味いかな？

こうして、“ホテル・アグスタ”での警護任務は終わった。
／＼なのはside out／

ティアナがいい方向に理解してくれたらいんだけど……………

ホテル・アグスタ 後編（後書き）

次回は白い悪魔じゃなくて………魔王の登場です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8869u/>

魔法少女リリカルなのはStrikers～血塗られし王～

2011年11月29日14時00分発行